

“とつちちゃん”先生の国語教室

— 桑原暁一・遺稿から —

国文研叢書  
No.22

社団法人 国民文化研究会

“とっちゃん”先生の国語教室

—— 桑原暁一・遺稿から ——



千歳高等学校でのスナップ(昭和47年・60歳)



“とっちゃん”先生がかかれたスケッチと和歌



“とっちゃん”先生の女装(千歳高校の運動会での仮装行列)

はしがき（本書の刊行に当って）

ここに公刊することになった『"とっちゃん"先生の国語教室』は、私の先輩にあたる故桑原暁一さんの遺稿の一つである。

桑原さんは、東京都立・千歳高校を定年退職されて日も浅い昭和四十八年五月十九日に、都下の病院での手術の効もなく、多くの生徒たち友人たちの愛惜の涙の中で、六十一歳の生涯を閉じられたが、最近見出されたこの原稿は、昭和三十年三月に四十三歳の折に書かれた旨が、原稿末尾の日付によって知ることができた。すなわち、高校の国語教師として、精魂を傾けて生活しておられた桑原さん壮年期の執筆であり、教える生徒たちの"心"を、つねに教師としての最大関心事と肝に銘じ、渾身の愛情をもって指導されたさまが、手にとるように窺える文章でもある。

桑原さんは、一高文科を経て、東大文学部国文学科といういわば世にいうエリートコースを進んだ学究であったが、生涯を通じて栄達などには目もくれず、ひたすら国語教師たるの道を求めつづけられた。しかも、世俗さながら凡人の姿のままに、身だしなみなど一向にかまわず、瓢々とした挙措動作の中で、いつも本物と偽物との区別を鋭く見分ける、といった人柄でもあった。生徒から付けられたニックネーム“とっちゃん”はまさにピッタリであったかもしれない。そうしたこともあって、歿後の葬儀は、ごくひっそりと行われたのに、すでに退職した“とっちゃん”先生を慕って、大ぜいの生徒や卒業生たちが、誰いうとなくさそい合せて集ってきていた。

一方、桑原さんの学識は、実に広汎にわたり、かつ精緻をきわめた感があり、私はじめ多くの同人が、そのご指導にあずかったものである。私の「編」という名目で公刊された『日本思想の系譜―文献資料集―』（国文研版・時事通信社版ともに）および、「国文研叢書No.10」として出た『欧米名著邦訳（明治）集―文献資料集―』は、ともに桑原さんの主導でスタートし、その助言に貫かれて同志諸氏との協同作業が整ったものであつ

た。また、同じく「国文研叢書No.2」として昭和四十一年には、『日本精神史鈔―親鸞と実朝の系譜―』を、昭和四十五年には「同No.11」として『続日本精神史鈔―花山院とその系譜―』を、亡くなられたあと遺著として昭和四十九年には「同No.16」として『国史の地熱―聖徳太子と楠氏の精神―』の三冊が、桑原さんご自身の貴重な著述として残っていることも、限らない喜びである。

さてこのたび見出されたこの遺稿であるが、次のような奇縁を経てのことであった。桑原さんがその生前、無二の親友の一人としてお付き合いなさっていた教育学博士・元佐賀大学教授の副島羊吉郎さんが、桑原さんからの来信を見直しておられると、昭和三十年三月二十九日の手紙に「『人間教育としての国語教育』を一気に書きあげた」とあるのに気づかれ、ご遺族(長男・桑原須賀夫さん)に探してもらった所、不用になった試験問題用紙の裏を利用して、鉛筆でなぐり書きましたような筆運びのものが発見され、それを副島さんが丹念に別の原稿用紙(四百字詰八十九枚)に清書してくださったのである。副島さんから私にこのことを知らせてくださったお便りには、

「よみづらいことおびただしい原稿でした。しかし桑原さんは、「自分が一番力を注いだのは国語教育であったから、最後には国語教育に関することをまとめたい」と言っていました。その念願を果さずに亡くなられましたから、この論文を私は非常な関心をもって読みました。結果は深い感銘をうけました。桑原さんが後で書かれたら、もっと修正したことだろうと思いますが、大きな筋は大して変らなかつたのではないかと思います。」

と。

かくして佐賀の副島さんから、「桑原さんの鉛筆走り書きの原稿」と「副島さんが清書したもの」とが私の手許にとどき、その清書の中には、副島さんが原文の判読で迷われた筆跡箇所いくつかに印がつけられていた。それらの箇所については、桑原さんの筆跡をよく見て来られていた亜細亜大学・国文学教授の夜久正雄さんを煩わして説明していただくことができた。

その後、佐賀の副島さんからのお知らせで、「桑原さんの生前、桑原さんがご自分の

学校で生徒に出した国語の試験問題十三回分と、副島さんのご子息の受験勉強（国語）のために桑原さんから助言をいただいた貴重な手紙六通が見出された”旨が伝えられた。いずれも得難い資料と判断したので早速私の許にお送りを願ひ、さきの夜久さんと、いまお一人、桑原さんの親友であられ都立一ツ橋高校の国語教師を定年退職しておられる葛西順夫氏のお二人をお願いして、その中から「三例」を選んでいただき、あわせて桑原さんが作成された「試験問題」に対する「解答」をも、お二人のご協議によって作っていた。試験問題のあとにそれを付記することが出来たのは、望外の喜びである。これら数点のものを加えることによって、桑原さんの国語教育の具体的実例も見ることが出来、表題のように『“とっちゃん”先生の国語教室』との題名にふさわしいものとなり得たかと思う。副島・夜久・葛西のお三人に、編者として心からの御礼を申上げる次第である。

なお、折角の企画であるので、いま一つ、桑原さんの「講義」を一つ付け加えることになった。それは、亡くなられる三年前の昭和四十五年の夏、九州長崎県雲仙で開催さ

れた本会主催の第十五回「合宿教室」第四日目午前、全国の六十四大学からの男女学生を中心に四九一名が参加した場での「国史の地熱」と題した講義である。桑原さん五十八歳のときのものであるが、国語教育を踏まえてのものであるので、すでに『日本への回帰―第十五集―』に収録されてはいるが、本書の関連文献として、すなわち、桑原さんの「講義の実例」の一つとして、再録することになった。

さいごの「あとがき」であるが、この執筆者に講談社の広告業務部に勤めておられる若い磯貝保博さんを煩わすことにした。同君は本会理事にもなっておられるが、過ぎし日に千歳高校で桑原先生の教えをうけた青年であり、今もその遺志を体して社会生活を送っている一人である。同君の記す「あとがき」の中には、当時の生徒仲間たちが桑原先生を追慕する言葉などが紹介されており、亡き「とっちゃん」先生も、あの世できっと喜んでくださるに違ひなかるうと思う。なお、校正に従事してくださったのは磯貝さんのほか藤井貢さん、小柳志乃夫さんであった。

本書は小冊ではあるが、以上のような編集でもあり、江湖の高校国語教育に従事される方々に、なにがしかのお役に立つであろうことを祈ってやまない次第である。

昭和五十六年一月二十日

社団法人 国民文化研究会

理事長 小田村寅二郎

(亜細亜大学教授)

## 目次

	はしがき	1
一	人間教育としての国語教育	11
(1)	内側から読ませる	13
(2)	国語の教材	22
(3)	わかりよく	39
(4)	敬語について	41
(5)	しゃべること	46
(6)	劇	51
(7)	高校の国語の教師について	55
(8)	ことばに対する不信	73
(9)	文章教育について	77
	小田村寅二郎	1

二 質問に答えて—書簡抄	83
(1) やる気をおこさせるために	85
(2) 国語の勉強のしかた	90
(3) 志望校のきめ方	105
(4) ふりかえってみて	111
三 “古典の講義”の一例—「国史の地熱」	113
四 “考える国語”の「試験問題」・三例	133
(1) 高校一年生への出題	134
(2) 高校二年生への出題	139
(3) 高校三年生への出題	148
五 「試験問題」の解答	157
あとがき	162
磯貝保博ほか“教え子”たち	162

一、人間教育としての国語教育

## 凡例

原稿は、鉛筆の走り書きで未定稿と思われるので、読みやすくするために体裁上、次のように多少手を加えましたが、できるだけ原文のままとしました。

一、「かなづかい」は「現代かなづかい」に統一しました。ただし、疊字の符号「々」「／＼」は原稿通りに残しました。

一、段落、句読点、会話箇所の改行、カギ括弧などは付け加えたところがあります。

一、原稿の文字がうすれてしまっていたりして、どうしても判読できない箇所は、「(注……文字不明……)」としておきました。

(1) 内側から読ませる

塩田良平氏の大学受験講座を四回かきいた。受験講座の型にはまらぬ、言いたいほうだいをいうといった調子のもので、いかにもきもちがよかったが、他面高校生諸君にしてみればアテがはずれたような、つっぱなされたような感じでめんくらったであろう。

そしてその点不満だったものも少なくなかろうと推察させられた。これは、塩田氏自身承知の上のことであるらしく、終講のときにチョッピリこのことにふれて、国語の勉強というものは、元来そうしたもので、受験向きの型にはまらないところにむしろ大切なものがあるのだ、というようなことをいわれたが、同感を味ったことであつた。

いまの高校教育はすべて受験本位で、それはそのことを表面に掲げるといなにかかわらず、実際においてみんなそうなっている。国語科についていえば、それは教材の選択にあらわれて、とに角何が出てもいいようにというのか、デパートの食堂のメニューのように古今東西何でもチョッピリずつ一応はやっておくという傾向がつよい。

しかし、それはまだいい。問題は、教材よりもそれに対する態度の方にある。

万葉集の歌を勉強するとして、それはあくまで自分の心にかけて勉強するか、自分の心のおいたまんま、つまり受験のための知識にいくらかつけ加えるくらいのつもりでやるかのちがいである。こんなことをいうとさもしくきこえるかもしれないが、この二つの態度のうち前の態度は必ずしも受験の目的にかなわないことではなく、むしろこの方が知識も身についたものとなることはわかり切ったことである。ただこの場合には、あれもこれもやるといふわけにはいかない。われわれ人間同士のつきあいと同じように、広く多くの人とあさくつきあうか、少数の人とふかく知りあいになるかと同じで、そこには時間をかけるということが大切で、そうでなければ、親しみが出てこない。親しみが出てきてはじめて対象のこころもちもよくつたわってくるし、その性格ものみこめる。こまかなわずらわしい語法も、いわゆる「文法」といったヨソヨソしいものではなくして、相手のもつ性格なりクセなりとして、相手ときりはなせない生命の、あ、わ、れ、と、して親しめるわけである。しかしこうなるのは今云ったように、ある程度の時間がどうしても必要で、普通の場合は、そうそう何でもやるといふわけにはいかな

い。しかし、それでいいので、何でもちょっとやったが、何もほんとうには知らないよりは実力はたちまちまざっているのだから、応用がよくきくので、受験のためにも有効だ、ということになる。

——つい受験のことを引き合いに出してしまったが、それはそう気にかける必要はない。ぼくがいつもなさけなくなっているのは、すべての教材が受験のための手段となつて、それ自身が目的とされていけないことである。『つれづれ草』などはそのいい例で、『つれづれ草』といえは受験を思い出すくらいになっている。この書物は徳川時代には教訓書としてポピュラーであったが、今日では、受験参考書として不動の地位を確保している。むろん今日では出題も語句の注釈だけではなく、その思想的内容や著者の人生観などにも及んでいる。しかしそこでもやはりわり切った、あれかこれかの解答が要求されるので、作品が自己の外なる存在である事情にはかわりはない。一個の生ける人格としての兼好とその作品とに、一対一の関係で対決するということはおき去られているわけである。一体にどんなすぐれた古今の名作でも一旦学校の教材となつたら——国語の教師の手にかかったら最後、たちまち味けないつまらないものと化してしまふ。

生徒は自分の心の渴をいやすためには、いきおい自分の読書へとかり立てられる。これでいいのだ、教師として今更何を煩うことがあろうか、ともいえる。しかしそれでもいいかも知れないが、このことのために、『つれづれ草』は受験参考書として以外には生涯かえりみられないという事態は、ほってはおけないような気がする。『つれづれ草』だけならまだいい、すべての一流の作品が、試験受験の魔法がかかって、本屋の書棚や受験生の机の上に、本来の自己とは似ても似つかぬ異形の姿でさらされているのはたまらない。あるいは逆に、たとえ受験のためでもいい、『つれづれ草』全部をまるごと、ていねいに通読するようであってほしい。できれば二度三度くりかえしてよんでみるがよい。テキスト用、もしくは受験用にあちこちぬき出したものですませたのでは、『つれづれ草』をよんだとはいえない。ほんとによみもしないのによんだ気になるだけ、まるで読まないのよりはタチがわるい。

このごろ「何々の文法」というのがはやっている。「つれづれ草の文法」というように。しかしそれは、普通の文法を『つれづれ草』にあてはめただけで、まだ「つれづれ草の文法」にはなっていないのではないか。すべてが作品の外なるものばかりである。

その内に入りこめ、そうすれば「つれづれ草の文法」とともに、普通の文法も身につくであろうのに。

あまり欲をかいてアブハチトラズになつてはいけない。「源氏物語」などは、とてもマルごとよむわけにはいかないから、思い切って切りすててよい。「竹取物語」は短いものだし、話もおもしろくてよくわかるから、その点の興味にひかれるから、「内から」よむのにはむくかも知れない。とにかく内からよむようであれば、逆にいえば、外から文法せめてよませてはこんでいたのでは、その文法自身もいつまでも身につくことはない。ぼくはかつて下村千秋氏の（氏は故人となった）『中学生』という小説をよんだ感銘を忘れることができない。

一部のある教師によって劣等生のレッテルをはられたある農村の中学生が、家計のタシに養鶏をやるうとする。そして町へ行って参考書を買ってきて、それを実地にこころみて成功する。学校の社会科の教科書などはまるで理解できない。使つてある文字がむずかしいというようなことではない。少し極端にいえば、内容がわかれば文字も自然よめてくるが、逆に、文字はよめても内容はわからない。この中学生は養鶏の本は内側か

らよむのに、社会科の本はそれができない。あくまで自己の外のものであり、無縁の存在なのである。これは特別の例で、これをもってすべてに適用させるわけにはいかないが、しかし本を内側からよむという意味においては、一般的に考えていいことである。

それならば内側から、つまり自分を対象のなかに投げ入れてよむようにするには、どうしたらよいか。日本の古典などは、どんなにしてみても若い諸君の心をひくことのぞめないのではないか——これは若しそうだとすれば一切はおしまいである。ただ受験のためということではひきつけるほかには手がなことになる。しかし多かれ少なかれ、古典としての地位を占めている作品が、全く彼等の心をひく何ものをもたぬとは信じられない。はじめはちょっとつき合いくいかも知れないが、なれば親しみをおぼえ気心もわかってくる、と考える方が必然性がある。

この論理をみとめた上での話であるが、内側からよませるためには、何といつても、ある作品をまるごとよまなければならぬ。断片であつては内側からよみようがない。『カラマゾフの兄弟』をあるところだけ数頁か数十頁をよんだり、筋のあらましを知つたりしてすませたのでは、こっけいなことであらう。ところが学校の教材となる

と、こういうことが平気でおこなわれているのである。われ／＼教師はみんなどうかと思いつながら、マア仕方がないとそのままにしている。この点ではいまの教科書は、少くとも文学教材として失格である。ぼくは何かの作品が断片的のっているのが大きらいで、その全体をよませたいと思つても、経済的な困難がつきまとうので、結局ある程度でがまんしてしまふ。たとえば、ぼくの使用していたある教科書に志賀直哉の『焚火』がのっている。長編のホンの一部をのせるくらいなら、小さい短編でもその全部をとる方がよいと思うが、この小さい『焚火』でさえある部分——しかもこの作品にとつては勘所となつてゐる部分——がカットされているのを発見して、しゃくにさわつたことがある。むろんそこには、教育上の心くばりとかいうりくつはあろう。それならほかの適当なものに代えたらいい。しかし、毒にもならなければ薬にもならぬ「教育的」な作品などよませていたら、生徒の心はいよ／＼国語からはなれていくばかりである。もっと思い切つて「毒」もそのままにして、あるがままに、まるごと与えなければならぬ。教育界のこうした「ことなかれ」主義は、どうしても追放せねばならない。ぼくは中学の教師をしていたとき、教科書に中勘助氏の『銀のさじ』の一部分がのつていたのを機会

に、岩波文庫を生徒全員に買ってもらって全部をよみとおしたことがある。それはぼくの好きなものであるからでもあったが、ある作品——かなり長い作品をよみきつてしまふという経験を与えたいと思ったからであるが、生徒も大変よろこんでくれたようである。とにかく全部よんだ上で、何かわからないところ、問題となるところを質問させると、みんなどん／＼といろいろきいてくるのである。全部をよんでもおもしろかった心はずみがあるからで、それなしに、はじめから部分部分のつぎはりは、彼等の興味をむりにうばい取ってしまう心なき所業である。とにかくまるごとそっくりそのまま与えることである。この点では今日の教科書はみんなだめで、高校程度なら当時代の代表作のうち適当なものをえらんで、その全部をおさめた大部のものをつくってもらいたいものである。

ぼくがここで言いたかったのは、内側からよませるといふことであつた。そしてそのためには、ある作品をまるごと与えることが何より大切なことである、というわけである。内側からよむことは、自発的にやるほかにないことで、その作品が生徒に興味のないものならどうにもならないわけだが、そういつてすませておくことはできないので、せ

めて教師自身が、そういう態度で彼等にはたらきかけ、彼等の自発性をうながさなくてはならない。教師が作品の外からばかりつつきまわし、なでまわしていたのでは、彼等の自発性は出ようとしても、引っこんでしまうほかはない。教師のつくり出すふんいきのなかに、知らず／＼のうちに彼等を取りこんでしまうことが大切で、それには、教師自身がやはり文学者でなければならない。

人間教育ということは、国語教育のになう重要な役割であるとすれば、文学作品はそれのもっとも適当な教材である。多くはのぞむ必要はない。一つの作品、一人の作家を、ほんとうによく知りそれと親しむこと、それだけでもいいことである。この点では、昔の教育の方に長所があるといわなくてはならない。論語一冊をくりかえしよむ。ほとんど全部をそらんじてしまふまでくりかえす。このようにしてしたしんだものは、のちのちも、生涯忘れることもなく、折にふれて再び三度よみかえして、心のなぐさめともはげましともなりうる。

しかもそれはたえず自分の生活——精神生活の実践——とむすびつけられて問題とされる——すなわち内側からよみとらせる。

わからなくても一向かまわない。むしろ、わからないところのある方が自然である。それは一生の問題だからである。問を設けて、あれかこれかきめてしまう受験むぎの勉強ですませているところには人間の成長ということはない。試験の終了と同時に用がなくなつて投げ出してしまふ今日の一般のていたらくは、いくら歎いても足りないくらいである。

## (2) 国語の教材

国語科であつかう教材はどんなものであろうか。国語でかかれ、話されるものすべて、ということもできるが、それでは国語科として何をやらうかといふのかわからなくなる。ある文章がある。——それは社会科の教材か、理科の教材か、国語の教材か、そこにおのずから何らかのちがいがみわけられる。いうまでもないことのようにであるが、ぼくは「人間」の立場からかかれていますかどうかということによって、区別したいと思う。「結核」をとりあげると、それはどういふ病気か、それにかかる原因、その治療法

などがかかれていけば保健医学の本となるが、一人の結核患者の体験記録としてかかれてあれば、そのなかに、自分がこの病気にかかった原因とか、治療法のこととかかれてあっても、それは一種の「文学」であって、国語科の教材となるであろう。ある問題をそれにかぎって——いいかえれば、専門的に研究し叙述したものは、決して「文学」とはいえない。いかなる意味においても、文学といえないものは国語の教材とはならない。文学とはそれをかいた「人間」がそこに出ていることであって、かかれた事柄のなかに人間が出てくるかどうかということではないことはいうまでもない。したがって、国語は人間を相手にするのであって、専門的な知識をうるためではない。しかしここに問題があるので、人間と知識とは簡単に切りはなされないということがある。

人間とは知識をもつものであるともいえよう。ほかの動物には知識というものはない。したがって、ある人間のかくものは、どうしてもその人間のもつ知識がそこにあらわれる。知識をなかだちとすることなしには、何事もいいあらずことはできない。教材としてきわめて多く取りあげられる寺田寅彦の「随筆」がある。彼の随筆はむろん彼の専門である物理学の研究をまともに取り出したものではない。そこには一個の人間とし

て、彼が見たりきいたり感じたりしたことがあらわれている文学作品である。しかし彼  
はあくまでも物理学者であり、これと彼の「人間」とはきりはなすことはできない。し  
たがって彼の見ることに感ずることも、科学者としての目で、心で見たり感じたりして  
るわけで、彼の専門とする物理学の知識なり研究意識というものがそこに顔を出すこと  
はやむをえないし、むしろそれなくしては彼の随筆は、性格のない、つまらないもの  
なってしまう。そこでそれが一面において「文学」であることもうたがいないところか  
ら、国語の教材として取あげた場合、われ／＼教師は、そこに書かれている科学知識に  
気おくれを感じざるをえない。

素粒子理論とかいうのをマスターすることなしには、湯川秀樹のかいたものは扱いた  
くないし、又十分扱うこともできないということになるのである。そこでいきおい無理  
をして、寺田さんなり湯川さんなどの専門とする世界に首をつっこんでみるが、一朝一  
夕にどうなるものでもない。もしどうかならそれこそ国語の教師などやめてしまっ  
て物理学者になるであらう。そこでいわゆる科学随筆はひどくあつかいにくいものにな  
る。しかし程度の差こそあれ、同じような事情はあらゆる教材にもつきまといっているの

である。一向に音楽を知らないでヴェーバー・トーンベンの伝記を取り上げてみても、ピンとこないようなものである。こうなると、国語の教師はエンサイクロペディア的な知識が要求されるので、レオナルド・ダ・ビンチのような博学の天才でなければつとまらぬことになる。そこで、こういう余計な苦しみをあじあわせないですませたいとなると、語句の注釈だけをしていれば何とかごまかせる。古典や言葉のむずかしい古体の文に逃げこむことになる。問題にかえろう。――

なるほど寺田さんの文章をほんとうに理解するためには、われ／＼自身が寺田さんほどの――あるいはそれに近い――科学者であるのが一番いいであろう。しかし逆に考えて、科学者として寺田さんと肩をならべる人はほかにいくらでもいるであろうが、そういう人は必ずしも寺田さんのような文章はかかない。寺田さんをしてあの文をなさしめたものは何だろうか。それは、寺田さんが科学者でありながら、つねに人間であることを忘れない人間であるからである。寺田さんの文章は科学的な知識を与えようとしているものではない。そこには、科学者である前に人間である寺田さんのいきづかいがあらわれているのである。人間をはなれた科学的知識がそこに示されているから、わ

れ／＼はその文章に感動をうけるのではなくて、人間をはなれぬ、科学を生み出すものである人間の生きた心が、そこに見出されるところに、心をひかれるのである。科学知識がなくてはわからぬ、というのではかえって、寺田さんの文章にねうちがなくなる。あべこべに、そんな知識のないものにも科学への心をかり立てる力のあるところに、彼の文章のとりえがある。ここをとりちがえてはならない。そのちからは文学者としての彼の力である。こう考えれば、自然科学に縁の遠い国語教師がもっとも寺田さんの文章を取あげるにふさわしいことになって、事情は一変してくる。もしもあまりにも専門的で歯のたたぬようなものであったら、それは寺田さんの「随筆」であっても国語教材として切りすてて一向かまわない道理である。

そして一方においては、たとえどんなすぐれた学者のものでも——平和とか自由について論じたものであろうが——それが格別すぐれたものでない以上は、むやみにありがたがって教材として取上げるのは不見識だといわねばならない。——ここに思い出すのは、いつぞやラジオでできた中島健蔵氏の話である。題は忘れたが、評論についての評論というべきもので、評論もまた文学でなければならぬというのがその論旨であった。

というのは、どんな評論でも——政治評論にしろ、経済評論にしろ、それが評論である以上、単に専門的知識をひけらかすようなものではなくて、それは人間の声でなければならぬ。人間が人間にはなしかけるものでなければならぬ。人間の心からの声として人の心をうつもの、そういう意味で、いわば文学でなければならぬということであった。その通りである。

これをここにもつてくれば、国語の教材は文学でなければならぬ。広い意味での文学なら何でもいいということになるわけである。逆にいえば、このような文学性のないものは、教材としてドシ／＼オミットしてしまえばいい。

数年前はじめて学校教師となり、中学校の国語を担当して間もなく、研究授業というのをやらざるをえなくなった。何をどうやったものか、まるで見当がつかない。何か「これは」というものをつかみたいと思って、手近にある書物を片っ端しからよみあさってみたが、これならというたしかなものはつかめなかった。ルソーの『エミール』をよむと、彼はエミールに言葉による教育は一切与えない。すべてじかに実地について教えたえる。書物は無用である。ただし例外として『ロビンソン・クルーソー』だけはよ

ませてもよい。というのは、それは間接的知識など入りこむ余地のない、自分の頭と手足だけで生活をきずきあげた物語であるからだ、という。ことばをはなれ、文学をすてたんでは、国語の教育などありえようはない。ぼくは全くなかりしてしまった。これでは国語の教師をやめるほかはない、人はわらうかも知れないが、いい年をして、こんなだらしのない気持の日々がつづいたことがあった。このルソーの考えをやっつけることはわけではない。「それなら何故お前はこの本をかいだのか」——これだけでもいいかも知れない。しかし、ルソーのあげ足をとってみても、国語は何を教えたらいいいのか、の問題を解く足しにはならない。ぼくは少なからずなやんだものだ。そこでようやくたどりついたのは、他のどの学科でもあつかわず、国語でのみまともに扱うものは、ほかならぬ「人間」であるという平凡な結論であった。まるで、四つ足であるき、二本足であるき、後で三本足であるくのは何か——それは人間である、というあの問答によく似ている。ロビンソン・クルーソーも、ことばはもっていたにちがいない。そして、そのことばは、やはり「人間」のことばであり、彼自身つくり出したものではあるまい。国語科でやることは、ことばによる人間相互理解である、ということ、ルソーに向って言

ってもわらわれないであろう。

ところで、ことばによる人間理解といっても、それは更に整理せねばならぬ多くの問題をふくんでいる。しかしぼくは、この問題をただ問題としてといていくゆとりはない。否応なしに毎日授業をつづけていかななくてはならぬ。間にあわせでも自分なりの一つのみきわめをもたなくては身うごきができない。そこで大体こんなふうに見当をつけている。——ことばは人間生活——この場合「人間」とは和辻哲郎さんのいう間柄において共に生きるものということであるが——から生み出されたものであり、間柄の生活がなければ、したがってことばはない。人間以外の動物にことばがないというのは、彼等に間柄の生活——コミュニティ——がないということである。

ところで、ことばはこの人間関係においてとりかわされる会話として、まず成立するわけである。逆にいえば、ことばをかわすことによって、われ／＼はこの人間関係のりこむのである。したがって、ことばを出すことがないことは、人間関係の外におかれることであって、それでは人間とはいえない。かつて、ヘレン・ケラーの伝記をよんで感じたことだが、彼女はことばがわからない、そのために、その性格が非人間的で粗暴

で手がつけられなかった。しかし、だん／＼人のことばがわかるようになる、その性格がかわって、おだやかになったという。つまり、彼女はことばがわからないために、正に人間でありえなかった。人間の間におかれた一種の動物にほかならなかった。それは自己を相手に通じさせるためには、わめいたり、あばれたりするほかはなかったのである。これは極端な場合であるが、ぼくは中学校にいたとき、心を用いたのはこの点であった。それは国語の教師としてよりも、むしろ一個の教育者としての心くぼりであったが、人間的な愛情にうえているということは、ことばにうえているということである。いわゆる不良じみた子供がいる、その子の家庭は——いや家庭というものがないといった方がよい、そのために心に正常な人間関係をもたないといってもよい——両親はなく、親戚に厄介になっている正に厄介者なのである。そういう子はおもてだって、あまり口をきかないで、目ばかり光らせている。かげにまわると、たえず人をいじめたり、こわがらせたりして、自分を押しつけようとしている。むろん学校の勉強はできない。ぼくはこういう子供に、しいて言葉をかけるように心がけた。教室でも何か簡単な質問をしては、なるべく口を開かせ、教室の仲間入りをさせようとした。ぼくのいうこ

とをきかないで、わきのものに何かコソ／＼いたずらなどしているのをみつけると、「ぼくはお前がきいていないと張り合いがないよ、ぼくをがっかりさせないように、よくきいてくれよ」なんてこともいった。むろんぼくは、ぼくのこの心くばりを過大評価するつもりはないが、その子供をいくらかすなおな子供にしたことは信じている。

余談になってしまったが、——ぼくは、国語の教育はこのことばの始源のあり方についても引きなおして行われなければならないと思う。ある論文をよむ——よむというのは間接に人の話をきく、ということである。きいたら、ききっぱなしのこともあろうが、多くの場合はそれに対して何かもつとききたいこともあろうし、自分からきいてもらいたいこともある。

ところが、相手の人はそこにいない。一方的にきかせられるだけである。そこで教師がその人の代役をつとめたらよい。教師はその論文の筆者になりかわって、みんなの質問にこたえ、その意見をきく、ここで会話が行われる。そうすれば、この一つの論文は生きた人間関係のなかにおかれたものとなる。むろん、相手のいうことをよくきく、きいてよくわかることがまずなければならない。そこで国語の教師は主に、この点に力が

入れられるのは当然で、決してまちがってはいない。しかし、多くの場合そこでまっ  
てしまう。よんだ感想を云わせることもあるが、それを受けとめてくれる相手がいるの  
かないのか、はっきりしない。空にむかっていう張り合いなさがそこにはある。教師  
は自分がその論文の筆者のつもりで、責任をもって一々それにこたえてやらなくてはな  
らない。このことは、人のかいたものをよむ場合でなくて、実際にその当人の話をきく  
ことのできる時と同じで、ただ話のしっぱなし、ききっぱなしでは、その話は生きて  
はこない。話をするとすることは、むしろ相手の話を引き出すための手がかりにほかな  
らない。話をしたら、それについて、できるだけきき手の質問なり、意見なりをきく、  
つまり今度は相手が話し手にまわる場合をつくらねばならない。

また余談になるが、昔ぼくは選挙の応援をやったことがある。候補者と二人きりで演  
説会場をまわった。こういういそがしいときでも、自分の話のあとで、五分十分でもい  
いから質問を受ける時間をつくる。そうすれば自然したしみがわいて、わかれぎわに  
「さよなら」といえば、聴衆も「さよなら」とこたえてくれる。ところが、一人で長々  
とおしゃべりをしておいて、おあいそのつもりで、とってつけたように、「さよなら」

と手をとってみても、何だかこっけいなだけで、聴衆はソッポをむいている。その間に人間的なつながりができていないからである。国語の授業がつまらない原因の一つは、これと同じ事情があるのではないか。

いつも何かをよまされてばかりいる。それが至極おもしろいものならいいが、あまりおもしろくもないものをよまされる。教師までむきになって、話し手、きかせ手にまわる。教師のつもりでは、少しでもためになることをいってきかせるつもりでも、きかされる方はたいくつするばかりである。国語の時間には、つねに話し合いが行われなければならない。人間的な話し合いの行われるのは、国語の時間において他にはもとめられないものなのである。ぼくはそれが何かつまらぬことで、時間のむだのように思われてならなかったが、それはこちらがわるいので、時としてお互にうまく話が通じ、心がふれあうことがあれば、そのよろこびは何ものにもかえがたいものがある。

ところで、この話し合いの場合、教師として注意しなければならぬのは、こちらの質問に対して生徒がこたえる。それはこちらの期待する答ではない、ほかのものの意見もとめる、こうして、いろいろの意見のあとに、やっとつぼにはまった意見があらわ

れてくるという場合、最後の答えだけをみとめて、前々の、そのほかのはまちがいだときめつけてはならないことだ。前々の意見があつて、その意見も生れてくることができたのである。つまり話し合いの結果、適当な答えがつくり出されたので、つまり、大げさにいえば、これは総合的創造なのである。むしろすぐれた生徒がそこで指導的役割をになうことは当然だが、しかし、数学とちがつて、あるものはまちがいで、あるものは正しいと、けつしてわりきれるものではなく、まちがった意見のおかげで、後の適切な答が生み出される、という連帯性に支配されるので、この点の気づかないと、生徒はまちがうといやだと思つて、発言をしぶることになる。だから、一つ一つの意見をよく考慮して、すべての発言が生かされるように、しめくくりをつけることが大切なことのようにある。

新聞、ラジオなどによるいわゆるマス・コミュニケーションというもののなかに、とりかこまれているわれわれは、ほんとうの人間らしいことばを、つねにとりもどす用意がなければならぬ。一对一のささやかな人間の話しあいをおもんじなければならぬ。マス・コミはベルジャエフのいつているように、人々を一つにむすびつけはするが、同

時に人と人とを、一対一の人間的関係をひきさくはたらきをする。いわば強力な古代帝王のように、奴隸として人々を力づくで自己の支配下に、一つにまとめてしまつて、一個の人格としての、人間としての人と人とのむすびつきを、うばつてしまふのである。それがぼくにはたまらないことに思われる。このマス・コミの暴力に抵抗して、一対一の、私とあなたとの、ひそやかな語らいに、いのちの火をたやさぬようにしたいのである。読書はまさに、その一対一のかたらいであるが、国語の授業というものを、そのようなものであらせたいのである。われ／＼一人一人が目的であつて、手段とはならない、しかも、お互にむすびつく話し合いを失つてはならない。マス・コミは一方的なたらきかけではないようである。そこにわれ／＼の協力と批判とを、たえずもとめていく。しかし、それはつまりは自己の手段としてであつて、一対一の関係としてではないのである。ぼくらは自己を目的として、しっかりつかんでいなくてはならない。一方的な無人格的な、外力に屈してはならない。そこで、たえず自己をあらわさなくてはならない。たとえ一首の歌でも、俳句でもいい、つくり、創作しなくてはならない。日記をかいておのれをあらわさなければならぬ。しかも、その歌、その俳句、その日記には

全力をそそぎこまなければならない。

今日の国語教育においては、上級学校へ行くほど、生徒に何かつくらせることを怠っているようである。それもつまりは、受験本位になっているからで、一方的ないわゆる知識のつめこみ教育ですませている傾向がよい。そこでは生徒の人間というものは、見失われてしまう。彼等が自己を表現するのは、試験の答案においてだけということになる。そして、できるとか、できないとか言っている。こういうぼくなども、現に、生徒にものをいわせ、ものを書かせることを怠ってきた一人で、何もいう資格はないが、時々何かの機会に彼等のあるものしやべるのをきいたり、学校新聞にかいているものを見ると、教室で文法など、シドロモドロで、閉口しているものとは思われない、しっかりしたことを云っていて、目を見はる。そして、孔子の「後生おそるべし」のことが、ふっと胸にうかんでくる。彼等はみんな生きている。みんな「もの思う葦」である。ところがぼくはみんなを殺している。そしてただやっていることは、彼等をそういう人格として見ていない。ただ、ぼくのいったことを理解したか、どうかだけを気にしている。これでいいのか、もっと彼等からきかなければならぬと思う。ぼくも中学校に

いたときには、機会をみては日記なり、手紙なりの形で、ものをかかせたのに、高校にきてからはさっぱりやらない。「源氏」や「芭蕉」の講釈をするのも、もとはといえ、人間感情をかき立て、生き生きとしたものにするためではないか。ところが、そのことが、かえって彼等の内発的な意欲を、おしつぶすのに役立っているとは何という皮肉であろう。もっと彼等にものをかかせ、彼等の生活意欲をあらわさせなくてはならない。そしてそれについて話しあわねばならないと思う。国語教師は司会者である。媒介者である。

ただいかにも時間がない。三百人もの生徒に力一杯かかせたとしたら、それをていねいによむことが一体できるだろうか。年に一べんだって大変なことだ。こう思うと、せっかくかかせても、それをざっとよむことすらおぼつかない。まして、それに対して一々こちらの批評をつけ加えてやったり、授業でとりあげて話しあうなどということは、とてもぞまれない。こう思うとついめんどうになってくる。しかし、思案していても何の足しにもならぬ。出来るだけ実行するほかはない。生かさなくてはならぬ。生かすようにしむけなくてはならない。他学科のことはわからぬが、少くとも国語において

は、教師はものを教えるという立場をすてなければならぬ。いつも人間対人間の関係をはなれてはならない。こう肚をきめると気らくになる。国語の教材には何が出てくるかわからない。ぼくなど、釣はやったことがないので、その方のことは何も知らない。ところが、生徒の中には釣がめしよりもすきというのがよくある。教材に釣のことが出てきたら、そんな生徒にきけばよろこんで、いろいろ話をしてくれる。何もムリをして知ったかぶりをする必要はない。

このように、経験や知識の点においても、教師の知らないことで、生徒の方がよく知っていることはざらにある。何しろ多勢に無勢であるからやむをえない。一方、もの考え方、感じ方も、教師の方が正しくて、生徒の方がまちがいだ、など云われないことはむろんのことである。いわゆる十人十色である。ここにあるのは、あくまで人間対人間の関係である。国語の勉強における教師の立場は、いわばオーケストラの指揮者、あるいは映画演劇の演出家のようなものである。

(3) わかりよく

教科書にのっている文章は一般にどうもむずかしい。内容がむずかしいのはいいが、内容はそれほどでもないのに、文章だけがいやにむずかしいのがある。実例は一々あげないが、わかりやすく云ったり、書いたりするということは、もう常識であるのに、どうしたことか。そんなものは教科書からカットしたらいいと思う。一日も早く断行してほしいことである。

いい古されたことだが、福沢論吉先生は自分のかいたものを、女中によんできかせて、よくわからないところは、書きなおしたという。わからないからありがたいというのは、お経だけにしてもらいたい。お経だってもととはお釈迦様の説法を「如是我聞」(かくのごとく我聞く)とお弟子さんが書きとめたもので、人を見て法を説くおしゃかさんのことだから、わかりいいことばで話されたものにちがいない。だからお弟子さんはそれをきいて感激して「作礼而去」したのであろう。ところが、時のたつにつれて、

一般の人間にはわからないが、それがありがたいものとされてしまったことは、ラテン語のバイブルと同じである。それは、人間関係が特権階級とそうでないものとに、はっきりわかれていたことの反映であった。それがキリストや釈迦の本意ではない。宗教改革は単に宗教上の出来事ではなくして、人間が人間となる運動にほかならなかった。したがって、それはルーテルのバイブルのドイツ語訳の仕事にみられるように、自分らのことばをおもんずることでもあった。わが国でも同じような出来事があった。親鸞は文字も知らぬ田舎の人のために、かな文字の文章をかくのだといっている。それは人間同士の信仰によるむすびつき以外の外的権威をみとめぬ彼としては、当然の仕事であった。

真宗教団を大きな勢力にのしあがらせた蓮如が、さかんにわかりいい文章をかいたのは、人の知るとおりである。わかりやすくいたり、書いたりする、ということとは、決して小さな事ではない。それは相手に、自分を与えることであり、相手から与えられようとすることである。わざとむずかしくいうことは、自分を相手から引きはなし、相手を自分からつきはなすことであり、一対一の人間関係をすてて、それによっ

て、いつのまにか自分を特別あつかいする動機がひそんでいるのである。ぼくはこの種のむずかしい文章に出会うと、無視することになっている。それはわれ／＼によんでもらうことをのぞんでかかれたものではない、とみとめられるからである。

#### (4) 敬語について

いうまでもなく敬語がむずかしいのが、日本語の特色とあってよい。それはやはり、人間関係をうつしているので、王朝文学などは敬語によって、誰が話をしているのか、あるいは誰のことをだれにいつているのか、主語や客語がなくてもわかるほどである。そのことは別として、今日のデモクラチックの時代になっても、それはうわべだけで、まだ／＼ややこしい。

(ぼくは敬語などすべてなくしてしまえというほど徹底することは出来ない——りくつとしてはいまでも自分で実行できないこともないのではないのだが——)ので、なるべく一対一の平等の原則の上に立って考えたいと思っている。)

学校の校長や会社の係長くらいになると、部下のものを誰でも君づけでよぶ。部下のものが対等に君づけでよんだら、おこるにきまっている。生徒同士のよび方をきいてみると、下級生は相手が一級上でも「さん」づけでよぶ。上級生は下級生を「君」をつけるが、親しくなればよびすてにしているようだ。もっとややこしくなると、本人に面とむかっていうときには「さん」をつけながら、その人のいない所で第三者にいうときは「君」よばわりをする。これはむろん自分のえらさを示すつもりなのである。気の弱い者になると、同一人に「君」といつてみたり、「さん」といつてみたり、はなはだ不安定なのもある。

それから厄介なのは「先生」である。生徒が教師を「先生」とよぶのはマア問題ないことにする。しかし生徒でも、高校生くらいになると、教師にむかつては「先生」とよびかけるが、彼等仲間で教師のことをいうときには「さん」づけにしたり、よびすてにしている。これは敬語本来の性質になつたもので、一向かまわないであろう。それはとにかく、「先生」とよばれる「先生」は、教師以外にずい分広く用いられている。「先生」とよばないときげんのわるい人が、はなはだ多いらしい。「先生」とよべば「君」と答

える、とでもいうところか。しかしいかに「先生」がはやっているからといっても、そうむやみにも使えないし、そこにある限界があって、その人の職業によっては「先生」といったのでは板につかない。さりとて「さん」づけですませたり、「あなた」といったのでは、敬意が足りないような気がして、まごつくことがある。そして、そういうよびかけなしにすませる不自然さをあえてしなくてはならぬことがある。実にややこしい。これは日本人ならではのわからぬ悲劇もしくは喜劇であろう。これはよびかけの敬語だけのことだが、それは敬語の法の一部にすぎない。敬語はこれだけではない。ある人Aがこう言ったことをぼくがBにいうのに「言った」「言いました」「お言いになった」「言われた」「おっしゃった」など、まず、発言者ぼくと高校生であるBとの関係、それからぼくとAとの関係、A B相互の関係などを頭に入れて、敬語のつかいわけをしなくてはならない。

生徒が父親の伝言を教師に告げる場合を例にとると、「父が今日の父兄会には出られないから、先生よろしく申してくれと言っていました」、生徒Aが生徒Bに「先生がよんでいるよ」ですまされるが、これも「先生がおよびになっているよ」といわねばな

らぬとか、生徒が他の教師Aの伝言を、教師Bにつたえる場合は、「A先生がB先生に——とお伝えしてくれとおっしゃいました」

一対一の人間関係において相互尊敬ということが当然であるとすれば、どうしても敬語がつきまとうことはさげがたい。しかし相手によっていろいろつかいわけることだけはしたくない。こういうほくも、生徒に対しては全く敬語はつかわないし、生徒から友だちに対するような言い方をされると、ムカッとするのは事実である。

しかし敬語を全くなくしてしまうことはできないにしても、社会的地位で呼び方をかえるのは不可。すべて対等で行きたいものである。よびすてならお互によびすて、君づけならお互に君づけ、「さん」づけならお互に「さん」づけで言いあうのを建前としたい。他の敬語もこれにならう。

その昔、安部磯雄・コマオ夫妻が、お互に「コマオさん」「磯雄さん」とよびあっているときいたときは、西洋かぶれのいやみを感じたものであったが、やはりこうでなければならぬと今にして思わせられる。小学校の先生などで、生徒が作文で「お父さんが——と言った」と書くと、習慣的に一々「おっしゃった」となおす人があるが、その生

徒がふだんそう言いなれて自然、作文に「おっしゃった」というのならないが、親に対しては敬語をつかうものだという態度でなおすのだとしたら、よした方がよい。ぼくの家では子供はぼくに敬語はつかわないし、つかわせたくもない。したがって作文の上だけで「おっしゃった」など書かれると、くすぐったい。地方の小学生などが先生と話をしているのをきいていると、敬語なんかつかわない場合が多い。教師も生徒も仲間どうしの対等のことばをつかっているわけである。さっぱりしていい。これでお互に敬意がないのではない。いわゆる敬語は何といっても身分地位の上下意識の生み出したものである。そうではなくて、人間関係における相互尊敬をあらわすなら、敬語もまた対等のものでなければならぬ。

教員組合の代表が文部大臣を君よばわりをして話題になったことがあったが、もしも大臣の方がこちらを「君」とよぶから、こちらもむこうを「君」とよんだのなら、一向さしつかえない。(大臣の方と組合代表とで相互に対等に「君」という敬称でよびあう、というのならいいが、そうではなく、わざわざ君よばわりして——この場合、「さん」の方が自然であろう——相手をおとしめる気持ならば) わざ／＼ぞんざいな呼び方をして相手に、おっかぶさって

行くつもりなら、やはり古い敬語観念が形をかえてあらわれたにすぎない。つまり一つの反動だといわなくてはならない。

(5) シャベること

ぼくは教師でシャベるのが商売だから「シャベる」ということは、呼吸するのと同じで別に気にもならないが、人によると人の前で「シャベる」のは、ひどく苦手にがてという人がある。お百姓は、一般にシャベるのはいやがるので、農村では人前でシャベることのできる人、いわゆる弁の立つ人間は、それだけで人から重宝がられる、一目おかれるということだ。これは農民にかぎらずコツ／＼はたらく職人などにも共通のことであろう。

これは公共性ということと関係があるので、つまり人前でシャベるといふのは、公共性になっていふことなのである。したがって公共のあつまりのときにはその公共性を実現するもの、つまり人前でシャベれる人がなくてはならないのである。そうかと思ふと（注……文字不明……）人前に出てシャベるのはいいが、それが好きな人間というタイ

プがある。たえず公共性からはなれることのできない、公共の場——晴れの場所で一席やりたがる人間なのである。こういう人間は人間として何だか信用できない気が誰しもあるものだ。誠実味が感じられない。ロベタ、話しべた、人前では口がきけず、口をきくとボソ／＼、つかえ／＼しゃべるような人間、そういうタイプの人の方に、人間としての誠実味が感じられるのである。その道の名人、達人といわれる人々には、このタイプが多い。文学者よりも政治家の方が弁が立つということは、政治家よりも文学者の方に誠実を感じる、ということでもあるわけだ。文学者は一般に話がまずい。あまり多くは知らないが、きくところによると、井伏鱒二氏などは、講演なんか死ぬよりもつらいらしい。川端康成氏の話を一度きいたことがあるが、まずかった。第一、声が小さくて、何をいつているか、よくわからなかった。武者（小路・実篤）さんのは何回かきいた。武者さんは講演に引っぱり出される機会が多いので、なれているところもあるが、時々ことばがきれて口をモグ／＼させていることがあり、決してうまいとはいえないが、それがかえって武者さんらしい誠意が感じられるといった具合である。文学者であまり講演などがすきでうまい人は、文学者としてのねうちがかえって疑問をもたされるような気が

する。こういう通念があつて、ぼくは数年前教師になりたてのところ、新教育で「話す」ことが国語学習の大きなネライとして取上げられていることを知って、昔の教育でそれが全くなおざりにされていたのにくらべて、大きな進歩だとはわかつてはいるものの、手放しですぐ飛びつく気になれないで困った。

話しのうまいということが、口のうまいということにすぐむすびついて、孔子さまの「巧言令色仁なるはすくなし」のことが、いつも念頭からはなれなかった。そのころ、モンテーニュの『随想録』をひろいよみしていて、「しいてしゃべる練習などさせんでもいい、きけばいい。さげばずにいられない場合には、誰でもさげびをあげるだろう。さもなければ、だまっているがよい」とあったのに同感したこともあった。ある国語教育雑誌の座談会に出席したときも、そのことを言わずにいられなかった。

ぼくの担任していたクラスにNという生徒がいる。非常な秀才で、中学でいつもトップを占めていたが、かれが無口で、クラス委員をやつて、ぼくとは始終連絡をとる立場にあるのだが、小さな声でつぶやくようにポツリ／＼というたち。めったにお言葉をたまわつたことがない。

「一体すぐれた才能をもったものは、あまりおしゃべりをしないものですね」  
 などといって相手の先生方をめんくらわしたのであった。

デモクラシイとは、めい／＼が対等に自分の思ったことを話しあう話しあいというものに基礎がある、ということはその通りで、まちがいないが、右のような事情を考えに入れると、ぼくはむしろその逆に、人前でしゃべろうとせぬ人にも、何かしゃべってもらうということだ、といった方がよくはないかと思う。

人前でよくしゃべる人間、そういう人間の大きな声だけが、公共性を代表するのではなくして、よくきこえないようなボソ／＼しゃべる小さな声があつまって大きな声となつてなりいでるのが、本当の公共性がおのれをあらわすのではないか。だから、国語学習で「話す」ということを取上げても、必ずしもうまくしゃべる、ということにとらわれなくてよい。むしろうらがえて、デモクラシイとはよく人のいうことを「きく」ことであるといった方がよい。こちらが「きく」気さえあれば、どんな無口な、おしゃべりきらいな人も、その固い口をわって、話してくれるであらう。人前ではしゃべらなくても、話しあいには必ずしもきらいではない。お互が相手からきこうとするそのところ

「話しあい」が生れてくるのだ。それを「話す」ことを、それだけをとり出して「うまく話す」技術など考えると、話すことそれ自身が魂のぬけがらのおしゃべりとなる。

いつぞや、朝日新聞の門田勲氏（だったかと思う）がかいていたが、イギリス人は酒場やレストランなどで、二、三人で、実によくしゃべっている。それは人の悪口や、自分のじまん話ではなくて、公の事柄についてである。きいていてあきれるほど、次々と実によくしゃべって、あきることがない。どうもイギリスのデモクラシーは、この二人か三人の小さなおしゃべりが土台になっているのでしつかりしているのではないか。議会でも必ずしも大きな声ではしゃべらない。少しもあせらずの語調でボソ／＼やっている。それでいて、みんなよく耳をかたむけている。つまり議場も酒場での話しあいの延長のようなものだといっていた。——それがおもしろかった。

人前でしゃべることの得意ですぎない人間が大小の政治家として、国や町や村をうごかすのではなくして、ぬきさしならぬ生活からにじみ出たような、小さくはあるが底力のある誠実な声がよりあつまって、やがて大きなひびきとなって、その村の、その町の、その国の政治というものをうごかすのでなくてはならない。その意味で政治家は文学者

でなければならぬし、文学者は政治家でなくてはならない。(注、原稿欄外に『チャールズ自伝』『リンカーン演説集』をよむこと、と付記あり)

(6) 劇

国語の教材としては、国語学習のいろいろの面を総合的にもっている、劇の脚本ほどうってつけのものはない。それを舞台で正式に演ずるということは、たまの機会にごく一部のものしか経験できないが、脚本よみ、朗読するくらいの稽古程度の実演なら、いつでも誰でも簡単にできる。とくに男女共学であるから一層都合がよろしい。これは役をわけてやらないで、本よみだけなら、一人で役をつかいわけてやるのも、それとおもしろい。何でもそうだが、特にこれに十分時間をかけてやらないと効果はない。脚本をくりかえしよむと、ともかく自分の受持った役のセリフは具つぎさにおぼえこんでしまふ。なまじ、芝居気など出さずに自分の役を一生懸命つとめる。——それだけの準備をして黒板の前で(注、……文字不明……)所作でやっただけでもクラスから拍手がおこる。

実にゆかいなものである。

芝居のことはゲーテの『ウイルヘルム・マイスター』で、若き日のウイルヘルムが人形芝居やいろいろの芝居にこるころがはじめにある。そこでゲーテは、「芝居というのは、自分から出て自分にかえってくるみちだ」というようなことを言っている。おもしろいことばだ。人間教育の実演としてすぐれたものである。これでわれ／＼はいろいろなことを勉強する。観世音菩薩は三十三身に變化へんげして衆生をすくうという。これは観音さまの慈悲のあらわれである。まさに名優というところである。してみれば芝居の全くない人間は、話せぬ、ヤボな人間である。

さりとて、あまり「芝居気の強い」人間もゆだんがならない。ゲーテのことばをかりて言えば、芝居けのあるというのは、「自己を出てゆく」ことであり、「芝居のうまい」人間とは自己にかえることのない人間ということであろう。（注、原稿欄外に「ゲーテのことばにとらわれるな」と付記あり）

一般に、いわゆる秀才タイプのもものは芝居気がない。芝居をやりたがらないし、へたである。これは自我意識あるいは支配意志がつよく、批評家にまわりがちである。それ

で「芝居なんかおかしくって」ということになる。自己を出ることができない。こういう人間はむしろカリカチュアか、喜劇の対象になる。(ぼくは中学校の学区内に前進座があった関係で、よくその芝居を見る機会を与えられたが、座長の河原崎長十郎という人は、何をやっても長十郎が出ている。甞右衛門の方が芝居がうまい。これは長十郎が支配力のつよい人であることを物語っているように思われる) ぼくはつとめて秀才を引張り出すようにしたが、どうも調子が出ないでれくさそうに、ただ口先だけでセリフをいう通有性がみとめられる。ぼくは何度でもくりかえさせて、ウント油をしぼる。しばらくやっていると、彼等にもその全体の調子に芝居気が出てきて、どうやら見られるようになるものだ。

一般に役をわり与えるには、そのもちまえの人柄にあわしたはまり役よりも、まるでかけはなれた役をやってもらうのが勉強になる。自分を出て自分にかえる——出っばなしでいつもお芝居をやっていたのでは困る。やはり自己にかえってこなければならぬ。しかし、その自己とは自我のコリカタマリではなく、いつでもおのれをわかって人に与える。いいかえれば、おのれへの執着からしばらく、ファイとはなれるゆとりのあることである。

一般に芝居ぎらいの人、文学ぎらいの人には、ガソコなエゴイストが多いようである。芝居をみ、小説をよんで、何だつまらない、結局芝居じゃないか、小説じゃないか、という。それで、自分のキンチャクだけつかんではなさない。これだけがほんものだという。

専門俳優とちがって、生徒はお互にその平素を知りあっている。そこである生徒が柄にもない役をやると、たとえば成績のあまりよくない生徒が秀才の役をしたとすると、見ているものはひやかす。

とにかく芝居は徹底的にやりとげたい教材である。本格的な脚本をあれこれつついてもいいが、彼等のみじかな問題をとりあげて即興劇風にしくませてやらせるのもおもしろい。教材は身近にいくらでもころがっている。生徒の作文からタネをひろって、それをくみあわせて劇に仕立てることもできる。新聞記事からヒントをえて、あれこれ思いつきを出しあっているうちに、何とか一つのものがまとまることもある。教科書にのっている小説なり、物語を脚色するなどむろんである。固い議論文でも、それをときほぐし多少色をつけて、劇にひきなおせば、またかわった興味がわいてくる。一つのまと

まった論文を、二人の対話に、さらに三人の会話にたてなおすだけでもいい。いろんなところみをやってみることはたのしい。

### (7) 高校の国語の教師について

小中学生くらいの年頃だと、無批判に教師を信ずる。大学教授だと大学教授なるが故に、そっけなくするようである。中にはさまって高校教師はどうか。生徒はもはや、小、中学生のように教師を尊敬はしてくれない。大学教授になれない中途半端なものが、高校教師だぐらいに思っているらしい。「万葉」や「源氏」の講義をやれば、その道の権威である何々博士の著書の方を信頼する。教師もどうせ同じ本をみてやっているのだろうと考える。それは事実とそうちがわない。現代文学なら、教師などから何か与えられようなどとは思わぬ。自分でドン／＼よんで自分なりに、いいとかわるいとか結論をつけてすませている。名のとおった一流文学者や評論家に来てもらって、話をきくことをよろこぶ。教師の出る幕などないと言ってよい。

生徒は、教師の授業をうけたくて学校に出ているわけではなく、何でもいいから毎日教えてもらって、卒業させてもらえばそれでいいというはらである。みじめなのは教師でござい、である。教師になるなら、高校の教師だけはやめておいた方がいい、とでもいうところである。

ぼくに近寄ってくる生徒は、ほとんどないが、たまに個人的に話をするきかいがある  
と、こんなことしかいわない。「先生の友だちで有名な人は、どんな人がいますか。」

ぼくこたえて曰く、

「ぼく以外には知らないね」

彼また曰く、

「桑原武夫という人がいますね、あれ、よみましたよ」

ぼくいわく、

「どういう人、その人？」

概して世間的なモノサシで、ぼくら教師をはかっているのだ。なかなかシツカリしている。こんなこともあった。ちょうど教科書でシェクスピアをやったばかりのときだ。

「先生今日、福原麟太郎のシェクスピアの話がありますが、先生も一緒にききに行きませんか」。

むろんその生徒は好意でいってくれているのはわかっているが、こちらはひげめがあるものだから、ついにくまれ口をたたいてしまう。

「ぼくはシェクスピアとは永いつきあいだから、今更人に紹介してもらわなくてもいいよ」。

事実わが身をかえりみて、はなはだ心もとない次第で、ぼくら高校教師、とりわけ国語教師は何をなすべきか、大学教授や著名な評論家などの受けうりでない、高校の教師として、他にかげがえのないもの、それを果して持ち合わせているか、それとも高校教師の方はくうための手段として、何とかやっておいて、セッセと専門の研究にはげんで大学教授の口をねらうか。こんなことについて、同じく高校の国語教師をしている友人と話しあったことも何度かあった。その話しあいをまとめてみると、大体こんなことであつた。――

ぼくらは、朝あしたに芭蕉を語り、夕ゆうべにゲーテを論ずる、古今東西何でも引きうけなければ

ならない。その上、やれ芝居だ、映画だ、ラジオだ、弁論だ、何だかだと、もりだくさんのカリキュラムが与えられる。そのどの一つをとってみても自信はない。それぞれのみちの専門家のへたな受けうりをして、お茶をにごす、というのがオチである。

そうではなくして、高校の国語教師としての専門家になるみちはないものかどうか。そこを考えなくてはならない。それはたしかにあるはずである。それはわれわれの対象が十六、七、八才という年頃の青年である。そういう特定の青年を相手にする国語教育であるからには、高校の国語教育には独自の場面がなければならないのは、理の当然である。この時期は自我のめざましい成長期である。そこでほかのどの学課でもやらないこと、やれないこと、この自己、もしくは人間というものを問題とすること、それが国語科の特色といつてはいいすぎかも知れないが、最も大事な仕事でなければならぬ。

文学をほんきにすくのもこの年頃だ。友だちと真剣に話し合うようになるのもこの年頃だ。ほかの学課はほとんど、何らかの知識を与えるものであり、あたえられた問題を解くが、自分自身を、あるいは人間そのものを問題とする学課は一つもない。それは正に国語科の任務でなければならない。

したがって、文学も芝居も、映画も、ラジオも、話しあいも、すべてこの人間について考える手がかりにほかならない。その一つ／＼を専門的に研究するというのではなくて、シェクスピアが出てきても、われ／＼はシェクスピアについては、しろうとであるかもしれない。しかし、彼の一つの作品が提出している問題——それが人間の、あるいは人生の根本問題であればあるほど、もはや専門家も素人もあるはずはない。その問題について、ちょうど人間、もしくは人生を考えはじめている青年と共に考える。ということ、実に当然、国語教師のしなくてはならない事柄である。

たとえば新聞という問題についても同じである。われ／＼は新聞というものについても、研究し知らなければならぬたちばにある。(注、……文字不明……)国語の教師としてはそれが人間にとって、いかなるものであるかの所に焦点をおけばよい。つまり国語科の仕事は人間研究であり、生としてのそれを、ことばを通じてとらえるのであるが、そのことばは、ことば一般ではなくして、自分のことばであり、それはわが感じ思ったことであり、又あなたのことばであり、あなたの感じ思うことにほかならない。いうまでもないことのようにだが、この点をぼくはしっかりつかんでおきたいのである。

「国語」とは「ことば」の勉強であり、きくことであり、話すことであり、よむことであり、書くことである、という。それは決してまちがってはいないが、それだけではくいたらない。足が地についていない不安定を感じさせられるのである。

ことばは、人と人との間に生れたものであり、生れるものである。つまり人間あつてのことばである。この人間をとり去つて、ことばだけを取上げること、それには意味のある場合もあるが、われ／＼国語の教師としては、つねにことばを本来の生きた姿においてとらえなければならぬ。すでに何度もくりかえし述べたことであるが、又ここでくりかえして、考えてみたい。

「きく」こと一つとつて考えても、「よく人のいうことをきく」とか「ちつとも人のいうときかない」という。つまり「きく」ということは、人と人との間柄において行われることである。わかりきつたことをいうな、といわれるかも知れない。しかし、このわかりきつたことが、はっきりしないから、マンゼンと「きく態度」などと人間関係から切りはなしたようなことをいい、考えてしまうのである。「きく態度」などいうものは、元来ありえないのである。あるのは話し手ときき手との間柄なのである。

この点でもおもしろいと思う話が波多野勤子さんの有名な『少年記』にある。一郎少年が中学（旧制）二年のとき、修身の教師が

「お前たちは心をからにして講義をきかなければならん。水の一ぱい入ったバケツには外からいくら水を注いでも、なか／＼入らん」

といったのに対して、

「先生、しかし、いくらバケツに水が入っていたって、水銀を入れればちゃんと入ります。先生の講義がぼくたちの心にあるものより高いりっぱなものであれば、自然に入ってきます」

とやりこめるところがある。

きく、きかん、が相互の關係に規定される一つの例であろう。

先頃も友人の奥さんからきいたことであるが、子供さんがある小学校を卒業して、その謝恩会があった。ところが校長先生がなが／＼とあいさつする。子供も父兄も茶菓を前に、いつまでもおあずけのまま。寒い日でみんなおなかはすくし、からだはブル／＼するし、たまりかねて、いやがらせの拍手をおくること兩三度、校長は、「大事なお話

ですから、もうちょっとだけ」

と、いってねばる。

「全くいやになってしまいますわ」

とのお話だった。

まことに妙な話である。誰にもきいてもらえない「大事な話」とは何であろう。

よくある話だが、これなど「大事な話」というのは、自分では「大事な」と思っても、相手がきいてくれないのでは、大事もへチマもない。

おしゃかさんも「縁なき衆生は度しがたし」といっている。徳川夢声さんの『話術』という本をよんだが、大しておもしろくなかった。徳川さんの話はおもしろいが「話術」はおもしろくない。話の一番大事なことは、間（ま）ということだ。話術とは間術である。というようなことで、別に耳新しい話でも何でもない。よけいなおせっかいだが、おそらくこの本は徳川さんが自分からすすんでかいたものではなくて、本屋からのまれて仕方なくかいたものではなからうか。

徳川さんの話のうまさ、おもしろさは話術というものを、それだけをとらえてから、

出てきたものではあるまい。この「ま」というものは、人を相手にして話をきかせてきた多年の経験の間に体得したのではなからうか。高校の教師も生きた人間を相手に話をするのが商売だが、きき手の方は先生と生徒という関係にしばられているので、おもしろくなくてもじつとがまんして、きかざるをえない。きかなければしかられる。一郎君のような生徒はめったにいやしない。そこで一人よがりですんでいられるので、「ま」というものがわからない。徳川さんの方は相手はわがままなお客であるから、それこそ「へま」をやれば承知しない。活弁（映画説明者）のときは、映画そのものに観衆の目がむけられているからいいが、映画からはなれて、「漫談」をはじめたときには随分苦労したろうと察せられる。徳川さんの「話術」はその苦労によってみがかれたのである。徳川夢声論になってしまったが、もう少しつづける。——話だけをうりものにする人は、はなしかでも講談師でもみんな「ま」が大事なことは同じで、徳川さんもなかまたちからそういうものだとはよくきかされたようで、その方面からしらすく身についたものがあつたのだらう。しかし一番大事なことは何といつても、徳川さんという人が生来のハニカミヤだということではないであらうか。ハニカミヤであることと話がうまいと

いうこととは矛盾のようだが、その矛盾のなかから彼の「話術」が生れ出たのではないであろうか。ハニカミヤというものは、自分を相手におしつけるのをさける、相手を意識しすぎて、自分は立つ瀬のない者になって、非常に間のわるさを、とりつくるおうとするあがきから、何か相手の気を引くようなことをしゃべらずにいられなくなる、といったあんばいなのではなからうか。新刊の『問答有用』などみても、「話し七年」はもと／＼「きき七年」からそういう感じがする。

ぼくは東京に育ち、東京ぐらしの経験しかないが、ぼくの妹が埼玉の農村にいて、妹の口から、農村のようすをきくわけだが、農村というところはきわめて、口のうるさいところのようである。都会から行った妹はそれが非常に神経をつかれさせる。農村は人口がきはくで、のんびりしているように思えるのは外見だけのことなのである。

「東京はのんきでいい」という。

「口がうるさい」というのは、つまり、人間関係が繁雑であり、密接であるということである。生活共同体であるからである。

東京の生活、しかもサラリーマンの場合には、となり近所のつきあいすらない場合が

多い。

「となりは何をする人ぞ」ですましていられる。目と鼻の先に住んでいる人でも顔も知らない。顔ぐらい知っていても、あいさつをかわすということがない。つきあいがないのである。昔「井戸端会議」というのがあった。水道が普及するにつれてすたれてきたが、共同井戸を使用する下層生活者の近所づきあいの縮図がそこに演ぜられるのである。

以前ぼくはしばらく満洲を旅行したことがあった。そして

「最近あったことだが」

といって同じ話をあちこちで、何べんかきかされて、なるほど満洲は土地は広いが、世間はその逆でせまいところだと痛感したことであった。

以上ゴタ／＼いろんなことをあげてみたが、要するに、ことばは、人間関係のなかにとりかわされるものだ、ということをはっきりさせたかっただけのことである。この人間関係を抽象して、きく、話す、よむ、かく、ということとは、事実からはなれた空論となりやすい、ということが言いたのである。だから同じ「話す」とか「きく」とい

っても、ラジオの場合は大分事情がちがってくる。そこには、話し手ときき手の間には、特定の間関係がない。だからただ一人マイクに向って話すのは、いかにもたよりなく、話しにくい。そこで放送する場合には、本来の場を設定して放送する。たとえば対談の形をとるとか、お客さんをあつめておいて、彼らの笑い方や様子を取り入れたまま放送する。そうすればラジオのきき手の側も、その仲間入りしたような気分になって、人間本来のきき手の立場で大きくことができるので、張り合いが出てくるというわけである。ラジオで放送する科目も——たとえば語学講座のようなもの——の場合でも、つづけている人には、きき手から文通があつて、その間に人間的なつながりがついてくるので、放送者も自然張り合いが出てきて、放送がやりよくなるものと察せられる。

それにしても一般的にいつて、ラジオ放送ときき手との間には、直接の間関係がないことはかわりがない。(この点は新聞と読者の関係も同じである。)

「ことば」という人間関係をもとにしたものによって、この、ことばはわるいが、人間関係の欠除態をうめあわせるための偽装であるといつてよい。ここに大きな問題がひそんでいることを忘れてはいけないと思う。どういふ問題かという、真の間関係とい

うものが、そういうこしらえられた人間関係にすりかえられてしまう、ということである。家庭で食事を共にしながら家族のものが話しあうことの代りに、一緒にラジオをきいてたのしむ、ということは、それとしてけっこうだが、その反面、それが習慣になっ  
てしまつて、自分たち家族が水入らずで話しあうという機会がだんだんうばわれてゆ  
く。ぼくの子供なんかでも、自分の好きな放送をきいているとき、ぼくが話しかけると  
「お父さんだまつてよ」と、にらみつける。ベルジャエフのいつてるように、交通通信  
の発達、映画、ラジオなどのマス・コミュニケーションの普及は、人々を一つにする  
と共に、バラ／＼にする。「人間」をこわすのである。(今日の学校教育そのものだって、そ  
の例外ではないかもしれないが、それでもここには、まだしも生きた具体的な人間どうしのあつま  
りの場所である。)ラジオをきく場合、われ／＼は意志をもつて、それを人間関係のうち  
に利用すべきものである。主婦が料理法の放送をきいて、実際に応用するのはいいこと  
だが、次々と、のべつにおもしろそうな放送をきいて、(注……文字不明……)の料理をつ  
くるヒマがないというのでは困る。ラジオをきくのではなく、きかされていたのではこ  
まる。そのあるべき位置をきめなくてはならない。

いつか戸川行男さんをおよびしてお得意の「親孝行無用論」をしたしくPTAの席でうかがったことがある。本にもなっているが、「親孝行無用論」は自然に「教師無用論」でもある。親は子供をそだてるのに苦労する。病気にでもなれば寝ずに看病する。この恩にはむくいねばならぬというが、だん／＼医学が進歩して、たとえば肺炎になってもペニシリンの注射をうてばケロリとなおる。親の心配などよけいなものになるという具合になれば、親孝行などもとめる義理はなくなるといふ。この論法で、どんな事柄でも百科全書を引張り出せば、たちどころにカイケツしてくれる、レコードをまわせば、すぐれた説明がきけるといふあんばいになれば、その道の教師などはいらなくなる、というのである。ぼくはこれをきいて、古い一方的な親孝行論や師弟道に対する反動として、一つの解毒剤にはなるが、もしまともにこう考えているのなら、あまりに楽観的で、おめでたすぎると思った。

この議論をそのままおしすすめれば、恋愛も友情もすべて無用となるであろう。これをきいて、お母さんたちはどういふつもりかしらないが、声を立ててわらっていた。

が、それと共に、教師としてのぼくは、この論をきいて、わが身をかえりみて、戸川

さんのこの論にむきになって議論する勇気がなかった。「なるほどぼくなんかこういわれてもしかたがない。もっとえらい先生方の身とみるなら、親達にもきいてもらった方がマシなもの」と思って、苦笑しているよりほかなかった。

戸川さんは人間と人間との問題というものに、他の物質がとって代ることをみとめているかのようである。

話が少し脱線したが、ぼくがいたいたいののは、ことばはもと、人間のことばである、人と人との間にとりかわされるものだということであった。

「きく」ことがなければ「はなす」ということはできない。「はなす」ことができないのは、「きく」ことができないからである。「つんぼ」はものをいうことができない。だからよく「きく」ものは、よく「はなす」ことができる。このりくつは「よむ」と「かく」との間にもある。「よむ」というのは、文字を介して間接に「きく」ことである。「書く」というのは、文字を通して間接に「話し」かけることである。だからよく「よむ」ものは、よく「かける」はずである。「きく」と「はなす」とが会話として、一つの事実であるように、「よむ」と「かく」ということも、一つの会話である。特定のよ

み手に対してではなくて、「読者」という漠然としたものを相手に「著述する」ということのために「会話性」というものが、きはくになつてゐる。まんぜんと一般の聴衆に話をするのと同じで、それをそれよりもう一つ間接的にしたものである。

ぼくの母親はむろん「もの」をかくということなどしない。しかし自分の娘に対してはてがみをかく。おぼつかない手つきで、一生けん命にかく。よく「手紙一本かけない」というが、自分の親しい間柄のものに対すると、手紙くらいは字のかけるほどのものは、かけないはずなのである。ただ、気のひけるような相手に対する場合や、何かあらたまつた公的な手紙が思うようにかけない。それは親しいものにきらくに話ができる、気のひける相手や公の席上で、あらたまつた話をするとなると、舌がこわばると同じことである。そういうことは「話す」とか「書く」とか、それだけ取出してみてもはじめまらないので、そういう人間関係に入つて、自分をならして行くほかはないことである。相当世なれした人でも、そうたやすくはいかないものである。だからそういうあらたまつた場合のあいさつとか、手紙とかには一定の型があつて、それにしたがってやるのが無難だというわけで、昔からそういうもんきり型のきまり文句のような

ものがつくられているが、それでは生きた人間のことばでなく、あじけないものである。やはり話をする相手や、手紙を出す相手と自分との間柄にふさわしいことばで語る方がよい。誰でも初対面の人とのあいさつは、ことばを失ってぎこちないものである。それはあたりまえで、人間関係のむすびつきがあまりないから、この間の「ことば」が生れないのである。ヴァレリーがどこかでいっていたように、「身分のちがうものでも、したしんでくれば会話はかっぱつに行われる」ものなのである。初めて会った人でも、だれでも見境もなくしゃべりちらかすのは、普通の人間ではなくして、そういう人間関係になれている特殊な人間のことばである。

だから、結論的にいえば「きく」ことより「話す」ことの方がむずかしく、「よむ」ことよりも「かく」ことがむずかしいわけである。それは「会話」のなかにすでにふくまれることである。「会話」とは人間関係のなかに行われることであることを考えれば、そういう人間関係をもつときには、それに応じたきき方、話し方、よみ方、かき方ができるのが自然である。ぼくのところによこす生徒の手紙をみるとよくわかるが、生徒が教師に話すそのままかけばいいものを、手紙の場合には何か切口上の、何か大人ぶ

ったものいいをしようとして、実にぎこちない。よんでいて、くみとれぬような言いまわしがある。

ところで、「よむ」場合は、人からきた手紙とか、改めて先生の書物をよむ、という現実の人間関係のなかで行われるよりも、直接自分に関係のない人のものや、昔の人のかきのこしたもので、すなわち新聞とか書物とかをよむ場合が多いわけである。これは「かく」場合もあてはまるが、特定の相手でなくて、一般に「ものをかく」のは、これはかぎられた人のすること、普通ではないが、よむ方は多かれ少かれ（誰でもすることである。）ということは、人間は「話す」ことよりも「きく」ことの方が多く、「かく」ことよりも「よむ」ことの方が一般的であるということである。それは人間生活そのものが、そうなっているので、何事につけても、きいてみないとわからないことが多いし、読んで知らなければならぬことがふえてくる。

そしてその反面、ききかじり、よみかじりの知識がふえて、自分自らというものの存在がたしかでなくなるおそれがある。だからこの場合、あくまで、よく「きく」、よく「よむ」ということが大切になってくる。人と人とのつきあいと同じで、広くつきあう

一方、深いつきあいというものがなければならぬ。らんどくと共に精読が行われなければならぬ。広いつきあいは、深いつきあいの機縁であり、らんどくは精読をみちびくものでなければならぬ。

国語教育において、あの場合の場合と手をかえ、品をかえてやらせてみても、身につくものではない。そこには実際の人間関係がないからである。その実際の人間関係に即したことをみっちりやらせるほかはなく、又、それはちがった立場におかれたときに、その適応性をやしなうものでもある。

たとえば、中学校用のある教科書に、「演説」という項目があり、そのやりかたが書いてあるが、これなどまきに行きすぎといわねばならぬ。

### (8) ことばに対する不信

中野好夫さんがどこかでいっていたが、かかれた文章からその人間を信用することはあまりしないが、ひざをつきあわせて話しあった印象からの判断には、相当の信頼をも

つ、したがって、自分がものをかくのにも、自分にかかわりのない事柄をかくのは、氣楽であるが、自分のことはかいたあとで、どうしてもウソが入っているようであとあじがわるい、とあった。これはだれしも経験する「ことば」のもつ本来の姿をとらえたものと、いわねばならぬ。

積極的なウソをつくことが人間関係をぶちこわすことはむろんで、古来悪徳中の悪徳にかぞえられているのは、理由のあることである。文章というものは、人間関係が間接になるだけウソが入ってくる。むりにはじめからウソをいうつもりではないにしても、自分につごうのいいことだけいえば、やはり、消極的なウソをつくことになる。会話の場合には本当のことをいうというだけでなく、自分というものがあらわれる分量が多いということである。文章は必ずしも相手をバカにしないし、腹も立てない。しかし、ひざをまじえて話していれば、そのようすで、相手をかるくみていうか、こちらの出方によつては、腹もたてる。その人間関係のうちにあつて、人間がでてくる。だから、文章にはほれこんで、実際に会ってみて(注……文字不明……)することもあるし、文章はさほどでなくとも、実際の人物には感心することもある。

国語というものはどうしても、直接会うことのできない人のかいたものをよむことが多い。それは自分とはかけはなれた時代の人であり、かけはなれた生活の人など、かけはなれたものが多い。だからおもしろいこともあるし、よくわからないし、つまらないということもある。時代ははなれていても、同じ日本人のものだから同じ時代でも外国人のものよりもよくわかる、ということもあるし、同じ日本人でも、時代がはなれていれば、外国人でも同時代の方に、よけいしたしみを感じることもある。

石坂洋次郎さんの小説——何といったか、記憶にもないが——その中に女学生が同級生をおとし入れようとして、にせのラブレターをかく、そのなかに「恋しい」を「変しい」とかき、「悩ましい」を「脳ましい」とかいて、ものわらいのタネになるところがあった。しかし、これは漢字のかきまちがいが問題になっているわけで、何も漢字をかかなければならぬところではない。「こいしい」でいいし、「なやましい」でいいわけである。このように誤字を取上げることにしても、その取上げ方が問題なのである。「字を知らない」のがいけないのではなくて、よく知らない字は、かなでかいたらいい

のである。問題はいいかげんな字をかくというところの方にある。これはぼくはよく生徒にいうことである。漢字はそうよけいに知る必要はない。わからない字はかなでかいたらよく、かなでかいたらわからない「ことば」なら、かなでかいてわかることばになおしてかいたらよい、どうしても漢字でかくほかないもので知らない字がある場合は、もっぱら字書でしらべてかいたらよい、と。「もの」をかくのは、漢字をよけい知っているかどうかを相手に示すためではない。相手によくわかってもらえばいいのである。だから相手によくわかってもらうために、どうしても漢字で書かねばならぬ場合、「かな」ばかりで落語に出てくる熊さんの手紙のようでは相手にわかりにくいので、適当な漢字を入れてかくのがよいが、いいかげんな字をかくよりも、かなで書く方がよい。句読点を入れる、きれいにかく、というのも、つまりは、よくわかってもらうためである。相手に対する敬意のあらわれにはかなならない。その点さえしっかりつかんでおけば、漢字を知っているかどうかは、末の問題である。近頃では自分の名前さえ、かなでかく名士もいる。そういう場合には相手の名前も、かながきにする方が、むしろ敬意を示すことになる。文字だけではなく、言いまわしも同様で、相手と自分の関係で、い

いまわしも相手にわかりいい言いまわしでなければならぬ。ひとり合点に、かきながして意味の分りにくいものであつてはならない。よみかえしてみるといふと、そういうところを見出すものである。すべて相手によくわからせるといふつもりで、かかねばならないので、相手を忘れて、手前のことだけ氣にして、氣どつた言い方、もしくは(注……文字不明……)ない方をしてはならない。「身だしなみ」とおなじで、自分を見せつけるためのものであつてはならないし、ぶざまなかつこうでは失礼になるのと同じである。(注……文字不明……)といふのは敬語と同じで、身分関係の時代のなごりで、そういうものにとらわれないで、一対一の関係といふことでいけばいい。

### (9) 文章教育について

ここに一つの文章がある。たとえば志賀直哉の短篇がある。さてこれを教材としてどうあつかうか。むずかしい文字もことばもない。「解釈」の余地はほとんどない。一読すればすつと頭にのこる。教師と生徒との間には、その文章を「よむ」だけなら何の落

差もない。こうなると教師は何を教えたらいのかとまどってしまふ。自分から積極的に教えることのない空白をうめるために、生徒に「感想」をもとめる。誰か話のタネを提供してくれるのを期待する。誰かすすんで何かしゃべってくれて、それがキッカケとなって、生徒間に議論がたたかわされると、どうやら授業に活気が出てくるようになる。しかしこんなことはメッタになく、みんなおしだまっていると教師はよわってしまう。しかたなく自分の「感想」をのべてみても、自分ながら、どうでもいいことをいってような、力が入らない。その気持は生徒にうつって、授業の空気はきわめてたいくつなものとなる。こういう気分をあじわわない先生がいるだろうか。ぼくは不用意にこの種の教材にのぞんで、したたか苦しい気分をあじわった。教材として適当なものかどうかは別問題である。問題が文字の表面にないと、手も足も出ない、というのでは困る。それをごまかすために志賀さんの経歴をのべたり、他の作品をあげたり、志賀さんについて誰かがどんなことをいっているか、など、あらぬことをいう。その文章固有の問題をそこから引き出さねばならぬ。志賀さんの他の作品その『暗夜行路』をもち出すにしても、当面している作品とむすびつけねばならぬ。ほかのものをもち出して、すりか

えてしまつてはならない。生徒自身にかかわりのある問題として、かれらに問を発しなくてはならない。それだけの用意がなければ身うごきができない。ところで、そのためには、教師自身が志賀文学をよく知っていなければ、ほんとにその問題をつかみ出すことはむずかしい。

ある教科書にバルザックの短篇がのつていた。ところがぼくはバルザックのものはついぞよんだことはない。その短篇ではじめてバルザックをよむという次第だ。やがてこれを扱わねばならぬ。そこで、ぼくは夏休みに学校の図書館にあるだけの彼の作品を全部もち出して、休み中によむことにしたが、ぼくにやりたい仕事、よみたい本がいろいろあつて、とうとうよまずじまいで持ちかえてしまったのであつた。仕方がない。バルザックをなげてしまふか、あるいはこの作品一つだけについて何か問題を取り出して考えるか、二つに一つしかない。何もよまないで、誰かのバルザック論だけをよんで何かいうのはいやでたまらない。そこで、その短篇の上に目をすえてみたが、どうしてもバルザックの顔がうかんでこないし、バルザックその人のその文章固有の問題をつかむ手がかりがない。訳文がどんなになっているとか、(注……文字不明……)いるとかいって

もはじまらない。何か言を左右にしてもソラゾラしさが感じられるばかりだ。自分の得意な作家なら待ってましたとばかりとびつくが、まるで無縁のものに出つくわすと、とりつくしまがない。目をキョロ／＼させて、相手を観察してみても、うわつつらの、誰にもすぐわかることくらいしきゃわからぬ。それでは授業にならぬ。生徒のなかに誰かバルザックをよくよんでいるものがあれば、彼から話をきいて問題を出してもらうのもいいが、そんなことは、いつでも期待できることではない。

そこで、どうしても、一本勝負でいくほかはない。その作品自体の投げてる問題をとらえて、そこからバルザックというものの顔をおぼろなげながらも、知る以外には手がない。国語教師の悲しい宿命で、専門学者にはなれないところかも知れない。

生徒に「なるほど」「ああそうか」という目のさめる思いをさせる、納得のいった解脱感を与えることがなくてはならない。それにはまず、自分がその経験を知っていないければならない。われ／＼は特にバルザック通でもなければ、また必ずしもその必要もない。バルザックのこの作品が、どうしても自分として手がかりがないのなら、この作品はオミットしてしまってもよい。それにかわるものをもってきたって、いいと思う。教

科書の編次に忠実でなくてもよい。ぼくは苦しんだ。テーヌの『文学史の方法』のなかの「バルザック論」を生徒に紹介し、その要点と思われる部分をぬきずりにして、生徒によませ、それとその短篇とをむすびつけて問題を提供するほかはなかった。それが果して適切な、つまりバルザックに、又その作品に固有の問題であるかどうかは自信がないが、生徒にとって、一つの大切な問題である、とは信じた。

何をいっても一つ一つの作品の主題をつかまえるほかはない。それはいつも、人間の問題であることはきまっている。砂漠で猛獣に出あうという、普通ではありえない、そういう異常の場合に人間をおくというのも、人間の実験の一つの方法である。猛獣はヒョウでなくても何でもいい。その兵士は、自分に危害を加える気のないその相手を、不安にかられて苦しめる、殺してしまう。

分析はよりよくわかるためのもので、分析してかえってそこに生きてる作品をころし、しまつてはならない。単なるめずらしい話としてだけ受けとって、すませるわけにはいかない。そこには、やはり人間の問題がある。極限に人間をおき、人間というものを実験に演じて、みせているのである。

(昭和三十年三月二十九日)

二、質問に答えて——書簡抄

(1) やる気をおこさせるために（昭和二十八年九月十七日）

（前略）中学校あたりですと、ぼくも生徒としてのその生活をかつてしたわけですし、割合専門分化の程が低いので、メクラの垣のぞき程度は多少全体の内情をみて考えさせられたことはいくらかあります。その一つが例の下村千秋の『中学生』にとりあげられたいわゆる「劣等生」の問題で、あれは学校の教科内容そのものが知的一遍で、頭脳型の子には有利ですが、現実型の子にはむかないように歴史的に出来上っているのもななりませんでしょうが、そういう子を「劣等児」視しないで何とか引き立てて行く配慮は多少ともできない筈はありません。そういう型の子に限らず、一般的に小・中学校ぐらまでは、音楽、図工、職業科（実地教育の）をウント重視せねば、と思います。ぼく自身がこの方面で全くの音痴であり、手痴（？）ですので反動的に極端に考える傾きもありますが、このような学科によくい親しませることが、その人間一生の幸福にもいろいろ役立つし、理屈に引張られていつも前のめりの危っかしい日本人の姿勢を、重心のとれた堅実なものに引きもどすのに役立つのではないのでしょうか。そのほかのいわゆる「勉強」は思い切り簡単にしたらと思います。大兄のお話に「稲」一本で行った先生のことや、筑後川を徹底的にしらべた地理（今なら社会科）の先生のことがありました。それがいいように思われます。ただ、一つ

のことに集中すること。どうもこれがもの事の急所をとらえる要領だと思います。ぼくは文学をか  
くだけでも、話をするだけでも、たった一つのことですらぬかなければ生命がなく、人を打つ力がない  
と思いますが、一事が万事のようです。中学校にいたときよく理科や社会科の先生と話し合ったこ  
とですが、理科ではアミーバーからテレビ、水爆までやる。それよりもミミズ一匹に一年間取りく  
んだ方がためになる（ダーウィンのミミズの研究をいまま思い出しました）。社会科では世界の交  
通、世界の鉱業、世界の何々とか言って地球をいくまわりとかするが、先生と生徒の頭の中はカラ  
まわりだと笑ったものです。卒業式の謝恩会するとき、ぼくら担任でかぞえ歌を合作して合唱しまし  
たが、その中の「九つとせ、これまで地球を七廻り頭の中はカラマワリ」というのはそれをよみ込  
んだものです。（ぼくのことを歌ったのをご紹介しましょうか、「七つとせ、泣いたり笑ったり怒っ  
たり、うちのトッチャン七変化」。トッチャンとはぼくのニックネームだったので。）

アチーブのこともありますし、とにかく一応広くあたっておくこともあながち悪いことではない  
でしょうが、何としてももの足りないです。「知識はすべて忘れ去っても、あとにのこる何もの  
か、それを智慧とよぶならば、一生生きてはたらく——そして必要な知識をいくらでも受け入れ  
る。のみならず生み出すもの——そういう智慧をつけたいのです。」一つのことを徹底的に——そ  
こに智慧の泉がある、そう思います。こういう観点から視聴覚教育と称してワイワイ言いながら、  
楽をしながら、広い知識を与えるなどというのは危険です。アンドレ・モーロア（大兄からアランの

弟子ということをやがったのでよみはじめたのですが）もいつているように（新潮文庫『私の生活技術』の中で）映画ラジオ等の教育上の効用は生徒をそれによって真の勉強に発奮させる限りにおいてのみ認められなければならないと思います。

——申上げることが少しヒヤクしますが、いつかどこかでこれまでのところと結びつくと思いません。いま思いついたことを先に申上げますが、今日図書館でぼくの教えている生徒と一寸話をしたのですが、『宇都保物語』（源氏物語より前に出来たといわれている物語ですが）はサツパリわからなかったというのでおどろいたのです。長いこの物語のごく一部分（数頁）を抄出したものですが、実はぼくはこの講義だけは自分ながらりっぱに講義できたと思っていました、またみんなを笑わせながら大いに熱演したのでした。それで結果はこの通りです。実にイヤになります。ガッカリします。ぼくからいえば、正直のところ、「ぼくの講義をきいてワカラナイとは一体何事だ」といいたいところです。しかもその生徒はフマジメな生徒でも出来の悪い子でもないので。しかもこの結果です。つまり自分から求めて努力しないものにとつては何事もすべてネコに小判、豚に真珠なのです。（ぼくの講義が小判や真珠のようですがマアおききながしく下さい。）——人事でなく、ぼくも考えて見ればそうだったのです。逆にいえば、教師の方で生徒に「求める心」——自分で努力する意志をよびおこさせないのがイケないのです。アランは「授業のよしあしは一寸教室をのぞいてみればすぐわかる。教師の口数の多い授業はわるい授業だ」と『教育論』でいっていますが、ぼくの

はその見本のようなものです。しかし一週一時間か二時間ではこれしかやりようがない、とぼくは思っていたのですが、大いに考えなくてはならないようです。さりとてこちらでしゃべらないで生徒に知らせ発表させたらよいなことではありません。この「自分でやる氣」をもたせることは実にむずかしいことのようにです。「縁なき衆生は度しがたし」とはこのことを喝破した言葉でしょうか。それはあくまで自発的のものですから、それを教師が、つまり他のものがよびおこすということははじめから問題にならぬようです。教師におこられるからとか、単位がもらえないからとか、入試に差支えるからとかいう外的な強制力で押されてやっているにすぎないのが普通でしょう。日本古典を専門として、それでメシをくっているぼくだってその実力は見る人から見たら鼻の先で笑いとばされる位オソマツなもので、大学の国文科を出たというのも名ばかりで、在学中も卒業以後も御承知のようないわばヤクザ生活の連続で、うちこんで専門的研究に従ったことなどないのです。それでもボロを出さない程度に——もっともひいき目にいえば、生徒からあるいはさだめしよくわかっているくらいに買いかぶられているであらう程度に——やっているのは何としてもこちらには対象にある程度うちこんでいるからです。その目にはいろいろの問題が映ってくるし、それを何とか解いていかなくはなりません。それですからぼくのような実力の足らないものにも生徒以上に出られるのです。もし生徒のだれでも、ほんとうにうちこんでやるものがあつたら、おそらく一年を出ないで、ぼくの手のうちを見すかすほどの実力をもつに至るでしょう。そんな生徒が何人

か出てきたらこちらは大変ですが。——要するに彼我の力の相違は立場の相違から来ているので、その実力のちがいなどタカの知れたものです。ところがそのタカの知れた力のちがいがあるので、生徒側から越すに越されぬ大井川になっているのだ、ということが実は申したい点なのです。やる気があってやったらメキメキ力はつくのです。ある英語の書物をよむことが自分の運命にかかわる、という場合におかれたら中学一、二年の英語の力でも辞書と首っ引きで、何とかその全文を読み通してその内容のあらましをつかむことはおそらくできないことではないでしょう。下村氏の小説中の主人公の読書も正しくこれに近いケースです。——ここまで一気に書いてきまして、すっかりつかれてしまいましたので、例によって尻切れトンボで失礼しますが、前に申しましたように、出来ない相談のようですが、教育は——殊に義務教育の年代は——各自の持っている自発的精神をシゲキし引出すことにつぎるようです。与える知識が却ってそれを殺したり、にぶくさせたりするのは本末テントウで、知識の授与を通してそれをかきたてることではないでしょうか。自発的精神をかき立てるものは自発的精神のほかにありません。生命は生命によってのみ生み出されるわけですから生命のかよっていないただ受けうりされる知識の集積はかえて自発的精神を殺してしまうのではないのでしょうか。教えることはなるべく簡単に純粹で徹底したものでなくてはならない。ということもここで結びつくようです。

(2) 国語の勉強のしかた(昭和三十一年八月二十日)

(第一便)

茂さん、お手紙くり返し拝読しました。

実は僕はかんちがいして、今春高校を卒業なさったとばかり思い込んで、この間お父さんが見えられた時かんちがいだったことに気づかせられたのでした。うっかり者で困ります。その時もお父様から、あなたや浩さんのご勉強の様子をうかがって御苦労の程をしのびました。僕は字が下手で、自分の思うままにどんどん書きますと、あとで自分にもよくわからない位です。で、字をできるだけ流しきれないもどかしさを感じます。さて、国語特に古文についてのおたずねですが、本当の勉強をしたことがありませんので、自信のあるお答はおぼつかないのですが、へいぜい生徒諸君の相手をしていながら感じていますことを申し上げて参考に供します。

夏休みになる前に、僕の学校で実力考査がありました。僕は国語の一部分を担当したのですが、三百五十名程の答案を見て、これはというのは一つも見当りませんでした。国語のことはしばらく別にして、英語はどうかと、その成績をみせてもらいますと、平均点が十七点(むろん百点満点)。高校生の勉強は英語と数学にかかりきりの状態であることはあなたの御承知のとおりですが、

その英語の成績がこのとおりです。

そこで問題をみせて貰ったのですが、英語は僕にはよくわかりませんが、それでもそれ程むずかしい問題とも思われぬのです。旺文社の雑誌でごらんになったこともおありだろうと思います。どの大学でも平均七割とればパスは確実だということで、七割くらいとれない筈はないといつも思っていたのですが、平均点五十点とっているのは十人に一人という有様ですから、七割とることのむずかしさがわかったような気がしたのです。つまり時間をかける割合に実力が無いということでしょうが、どうして実力がつかないのか、考えさせられて、お父様もよく御存知の、僕の友人の夜久さんという人とそのことで話し合ったのですが、生れつきの才能ということとは別に、一体に、人の力をかりないで、自分でできる限りの努力をしないせいではないか、と意見の一致をみたのでした。自分でできる限りの努力をして、はじめて先生の授業や、いい参考書の有難さもわかるわけですが、今は世間が便利になりすぎて、目の前に参考書が山ほどあり、予備校やラジオの講座などありまして、こちらで努力しなくてもむこうで待ちかまえていて、いくらでも教えてくれるのです。だから生徒諸君の努力というのは、参考書をみたり先生の授業を聞く、ということにかかってしまつて、自分でやれるところまで自分でやる、という積極的な努力が失われてしまつてい

ではないかと思うのです。

学生諸君の御苦勞を思うと、このように簡単に言い切つていいものかどうか、心苦しいのです

が、この点についてはあなたのお考えもお聞かせ願ひ度いのです。それはとに角としまして、僕の意見をもうしばらく続けます。国語の勉強についても、今申したことが言えるかと思うのです。

「いい参考書」というのは、自分のどうしても解けぬ疑問に答えてくれる書物ではないでしょうか。だから自分で多くの疑問をもたねば、いい参考書を見出すこともできない、と僕は思っています。あるいはそういう参考書というのはいないかもしれませんが、逆に言えば、求めるところのあるものにとっては、たいいていのものは、いい参考書といえましょう。

参考書は文字どおり参考にするものなのに、参考書を離れたら何も読めない、というのが多くの生徒の場合ではないでしょうか。

理屈はこれ位にして結論的に申しますと、『つれづれ草』を十遍読む、とおっしゃるが、そんなに読めるものではない（のじゃないですか）。

それよりも僕は、その一段（本で一頁か二頁くらい）を一時間位にらみつけて、自分の力でどの位正確に、どの位深く読みとることができるかためしてみ、そんな勉強をおすすめしたいのです。そしてその後で参考書をよめば「なるほどそうか」とうなずくところがあるものです。自分にわからないところがわかる、ということが大切で、それなしに片っ端に参考書を見て全部わかったつもりでいる、ということが困るのです。これは他の学科でも同じことです。英語の原書を与えられて、辞書一つを頼りに、何百頁かの本を読むとなると自分がいかに力がないか身にしてみてわかる

でしょう。そしてその無力感に負けずに辛抱に辛抱を重ねているうちに、いつのまにか実力がつくのではないですか。実力がある人というのは自分の力のないことをよく知っている人のようですね。英作文でも、そばにある日本語の教科書でも何でも、片っ端から英語になおしてごらんになるというのではないのでしょうか。

そして、しばらくそのままにしておいて、英文を読んだ時に「ああ、あの所はこの言い方をつかうと英語らしくなるな」というような所にぶつかったら、それをつかって自分の書いたへたな英文を書き改める、というような、自分の勉強を工夫してみて下さい。また国語にもどりますが、どうも学生諸君は「にらみつける」ことが足りないで、すぐ早合点をしたり、参考書にとびつくのです。これが実力のできない根本の原因のように僕には思えるのです。

文法にしても、活用一覧表でも参考にして、『つれづれ草』の一頁か二頁分を自分で片っ端から分析していろいろ考えてご覧になればそれで充分です。——つまりいつも問題を見つけては自分でそれを解し努力することが実力というもの——身についた力をつくるもとではないでしょうか。ほくは古文の一通りの解釈をすると、必ず質問の時間をつくります。そして質問がなければいつまでも黙っています。「質問がなければこちらから質問をする」と云っておどすので皆ウノメタカノメで本をにらみつけていますが、いい質問はなかなかでないものです。

「一通り分った」ということは、分ったことにはなりません。一通り分った積りのところを、もう

一度よく考えるとまた分らなくなる——それが分ったところで、本当に分ったと云えると思いません。——何だか偉そうなことを申しましたが、僕の意のあるところをお汲み取り下さい。——どの学科でも必ず一時間に一つは教師に質問するように心がけなさい。しかし、教師が質問にすぐ答えられないからといって、教師を馬鹿にしないで、教師と一しょに自分でよく考え、調べて見るのが大切です。質問のための質問であってはなりません。一見問題のなさそうな所に問題を見出す、ということが学問であり、勉強であると思うのです。教師の授業を受けて、その中から質問の出ないような聞き方は、本当の聞き方ではありません。切符を買いさえすれば、寝ている間に目的地に着く、というのでは青年は満足しないで、惨々苦勞して高い山に登って喜んでいるではありませんか。勉強にしても、それと同じで、自分で山を作ってはそれを乗り越えていくのです。山を作らないで、参考書か何かを頼りにして、平らな道ばかりスタスタ歩いていけるのでは、勉強したということにはならないし、愉快でもありません。自分から困難を、問題をつくって、それを乗り越えて行く、抵抗なしには本当の努力もできないのです。参考書で勉強する、ということが、一人相撲になつてはいけません。相撲の稽古は自分よりも強い相手の胸をかりて、叩きつけられ、叩きつけられするというでなければ、稽古ではないでしょう。それと同じで参考書の力を借りて、いつも簡単に相手を負かしたつもりでいたのでは、自分の力は分らないし、いつまでたつても力はつきません。自分で相手にぶつかっていくことです。

教師や参考書はいわばコーチです。自分で努力したものにして始めてコーチの云うことがよく分って、自分のためになるのです。『つれづれ草』を参考書なしに、どこからでも、気のむいたところから勝手に、しかし丁寧に読んで下さい。分らない所は印をつけて、その他の所を読む、しばらくたつて、前に分らなかつた所をもう一度読んでみる。——そしてどうしても分らない所だけを参考書で調べてみる、というようにして下さい。細かい知識はあまり気にしないで（専門家ではないのですから）、そのうちに一度、『つれづれ草』のテストをして差し上げましょうか。

文学史のことは、文学史だけの文学史は面白くありません。必ず簡単でいいですから、日本史と文学史を読み較べて、日本史全般の中に、文学史を溶け込ませて、歴史の流れを理解して下さい。例えば、鎌倉時代の終り頃に兼好のような人間が出て、『つれづれ草』のようなものを書かれたということは、決して偶然ではない。あれが、平安時代や江戸時代に書かれるわけではない、ということが分るかどうかということが文学史を学ぶ大切な眼目です。文学の歴史の上に残っている作品はその時代の生きた印なのです。従つて今の僕らが今の時代を本当に生きて、そこに何かを感じ考えるならば、それが文学史を勉強するより所となるのです。

(第二便)

ただ今お手紙をいただき、繰り返し読みました。僕の申し上げたことは別に変わったことでもなく、お父さんからもいつも聞いておられたことでしょうが、「隣の麦飯はうまい」と云つたような

もので、違った人から聞くとまた別の味がするかも知れません。僕の申し上げたことは、国語の勉強に限ったことではありませんし、又いろいろの学科があるのですから、古文の勉強のためにあまり時間をかけることはお勧めできません。あなた方の将来にとって大事な学科によけい時間をかけた方がいいことはむろんです。

「予習が大切だ」ということは、予習というのは自分でやる、自分で考えることだからです。

そして自分の分らないところが分る、ということだからです。参考書に頼るとみんな分ってしまう、あるいは、分った積りになる、それが恐いのです。杉田玄白の「蘭学事始」をお読みにになったことがおありでしょう。蘭学者達が字書もなく、みんなが集って、オランダ語の医書をどんなに苦心して勉強したか。勉強にはいつもあのような、「無から始る精神が大切です」。だからと云って、字書も参考書も先生もいらぬ、というのではなく、字書や参考書や先生を活かして使うことができるような勉強をして欲しいのです。参考書に書いてあること、先生の云うことだけ覚えるのでは実力はつきません。何となれば、実力は自分でやる力だからであります。あせってはいけません。このことはあなた方に申上げる、というよりも、自分にも云ってきかせているのです。

僕など高校時代に人並に偉そうなことが云いたくて、随分つまらない本や雑誌をよみ散らしました。例えばシェイクスピアを読んだような顔がしたくて、あるいは読んだ積りになりたくて、翻訳でよみとばしたり、それでも間に合わないような気がして、例のラムの『シェイクスピア物語』で

すましたりしたもので、今考えてくやしくなりません。なぜ一冊でもよいから原書を字書と首引きで、一ヶ月も二ヶ月もかかって一語一語味わいながら、そして気に入った文句は暗誦するようにしながら、落ち着いて、時間をかけて、それに没頭しなかったか、そうではなくて、「読んだ」と云い度いためによむ、『ハムレット』一丁上り、『オセロ』一丁上り、と云った具合に読んだものです。ですから今になっても、シェイクスピアはちっとも読んだ気がしないのです。

僕がこの年になるまで何一つまとまった仕事ができないのは、この調子でやってきたからで、決して僕が謙遜して云っているのも何でもありません。自分で取り返しのつかないことをしたと思うからこそ、よけいにくどく分り切ったことをあなたの方に申上げることになるのかも知れませんね。今僕はロマン・ローランの『ジャン・クリストフ』を読んでいます。一五〇〇頁位ありますが、これも自分の修養の積りで、毎日少しずつ読むことにしています。一寸したものを読んで直ぐにも結論を掴みたがる自分の癖を矯め直す積りで、手習いの積りで、大作に取組んでいるのです（いじらしいではありませんか）。その中に、「自分のできる限りをする——それは同時に何人にもできないことをすることだ」と云う文句を見付けました。僕は子供の様に、こんな文句に出会って、自分を激励しているのです。人を羨むことはないし、自分の才能の拙なさを悲しむこともいらない。僕が全力を尽してやれば、誰にもできないことが一つは必ずできる——そのわけは、外の者はそれを誰もやらないから——あなた方にお話しする、というよりも自分に向けて云い聞かせているよう

になってしまいました。あせってはいけない、ということをお願いしてはいたわけです。学校の夏期講習に出ないというのは大賛成、それに出ていると何か勉強している気になる、つまり、アヘンの様な魔力を持っているからです。

しかし、独りよがりになってはいけませんから、NHKの高校講座か何か一つをずっと続けて聞くことはいいでしょう（それも必ず予習をして）。僕らの勉強法の問題は決して大学入試のためばかりではありません。日本の過去、八、九十年間の勉強のやり方がやはり、ただ欧米文化の結果だけを早く自分のものにする、というやり方であったわけで、子供が大人の真似をして喜んでいたようなものです。

その真似の仕方が大変うまくかったので、つい、いい気になってしまった、ということでしょう。敗戦でその返報を受けた訳です。あせらず、自分の足で一步一步歩いて行きたいものです。

### （第三便）

『つれづれ草』から問題を出してみましょう。実は他の学科でもそうでしょうが、特に国語は問題を出すことは、すでに半分以上答えを出しているようなもので、自分である文をよみ、どれだけの問題をそこから見出すか、どれだけのことに気がつき、どれだけのことを考えたかが大切です。ですから人から出された問題を解くことはやさしいので、又それほど重要なことではないので、いつも試験をする度にこのことを感じさせられるのです。

それは別問題として、つぎに二つの問題を出しますから、はじめ自分で考えて答を出し、それから参考書その他を調べて考え直してみてご覧なさい。それで分らないところがあったら、おきき下さってもよろしいですが、それよりも、「自分で問題を設定しながら読む」という習慣を身につけていただければ、と思います。前にも申したかもしれませんが、「山をかける」ことが出来ないのは本当に勉強したとは云えないのです。山をかける、というよりも山が見える、という方がよいかもしれません。ゴタクはこれだけにおきます。

〈問題〉

(一) 最明寺入道、鶴ヶ岡の社参の序に、足利左馬入道の許へ、先づ使を遣はして、立ち入られたりけるに、主まうけられたりけるやう、一献に打鮑(うちあわび)、二献に蝦(えび)、三献に搔餅(かいもちひ)にて止みぬ。その座には亭主夫婦、隆弁僧正、主人方の人にて座せられけり。

さて「年毎に賜はる足利の染物、心もとなく候ふ」と申されければ「用意し候ふ」とて、いろいろの染物三十、前にて、女房どもに、小袖に調ぜさせて、後に遣はされけり。その時、見たる人の、近くまで侍りしが、語り侍りしなり。

(1) 最明寺入道とは北条時頼のこと、執権職をやめた後剃髪(頭をまるめる)して最明寺を創建して、そこに入ったのでかくよばれた。又足利左馬入道は足利義氏のこと、左馬頭時代頭をまるめたのでかくよばれたところで、『つれづれ草』の筆者兼好法師ももとは卜部兼好といって宮仕

えをした人であり、西行法師は佐藤義清という北面の武士（院の御所につかえる）で、のち出家した。そうすると、同じく僧体になっても、法師とよばれるのと、入道とよばれるのと二通りあることになるが、どちらがうと思うか。

- (2) 酒のさかなが三通りあげられているが、比較的簡素なものであったことは何によってわかるか。
- (3) 隆弁僧正は鶴ヶ岡八幡の別当（長官）であるが、神社の長官が僧侶であるのはどういうわけか、又この人は最明寺入道のお供をして左馬入道邸に行ったと思われるのに、「あるじ方の人」といわれているのは何故だと思うか。

- (4) 面とむかって贈物を催促するようなことをいっている最明寺入道の気持を、この場合どうとつたらよいか。

- (5) 「前にて」というのはなくともよさそうだが、このことばによってどういことが感じられるか。
- (6) 「侍りしが、語り侍りしなり」について、——会話のことばとしては「心もとなく候ふ」「用意し候ふ」というように「候ふ」がつかってあるのに、ここでは「侍り」をつかっているのはなぜだと思うか。

- (7) 又「侍りしが」「侍りしなり」というように、ここには過去の助動詞として「き」「し」はその連体形）がつかってあって、前のところは全部「けり」がつかってある。これは何故だと思うか。

以上。

(二) 人の心すなほならねば偽なきにしもあらず。

されどもおのづから正直の人などかなからむ。おのれすなほならねど人の賢を見てうらやむは世の常なり、いたりて愚かなる人はたまたま賢なる人を見てこれをにくむ。大きな利を得むがために少しきの利を受けず、偽りかざりて名を立てむとすとそしる。おのれが心にたがへるにやうつてこの嘲をなすにて知りぬ。この人は下愚の性移るべからず。いつはりて小利をも辞すべからず、仮にも愚を学ぶべからず。狂人のまねとて大路をはしらば則ち狂人なり。悪人のまねとて人を殺さば悪人なり。驢をまなぶは驢のたぐひ、舜をまなぶは舜の徒なり。偽ても賢をまなばむを賢といふべし。

(1) 右の文は三段にわけることができ。その切れ目を『印をもって示せ。』

(2) 文中、左にかかげた語と同じ意味のことをちがった語でいいかえてあるが、それを書き出せ。

イ、おのづから——ハ、いたりて愚かなる人——

ロ、正直の人——ニ、受けず——

(3) 「この嘲」とはどんな嘲か、文中のことばをそのまま書き出して示せ。

(4) 「知りぬ」とはどういうことを知ったのか、文中のことばをそのまま書き出して示せ。

(5) 「うつるべからず」「辞すべからず」の「べし」は可能、当然、義務、推量のどれに相当するか。

一番の方はむずかしい。二番はごく普通の試験問題程度です。一番の方はどの参考書をみても全部答えることはできないかと思えます。『つれづれ草』の参考書は山ほどありますが、ほんとうに行きとどいた参考書というものは無い、ということがわかってもらえるかもしれません。参考書をしらべてもわからないような問題を自分で見出して考えるようにして下さい。そして結局わからないければわからなくてもよいのです。参考書に書いてあるくらいのがわかっていけば、専門家になるのではないのですから、それでいいわけですが、わからないことがいろいろあるものだ、というところがわかってもらいたいのです。

次の機会には現代文の問題をさしあげましょう。これらによって勉強の仕方を会得してもらえたらしあわせです。あなた方に私からお説教して、自分では少しも勉強していませんので、はずかしくなります。しかし、はずかしいということは知っていますから脈はあるわけでしょう。

#### (第四便)

前便にて現代文のことについては具体的ことはほとんど申し上げませんでしたので、ちょっと申し上げます。結論だけ申し上げますと、理科方面にすまされるあなたにおすすめるものとしては、寺田寅彦の著作をあげたいと思います。いろいろのものを読む時間はないでしょうから、寺田さんのを片っ端から——しかし、ていねいにおよみになるとよいと思います。お父さんがおもちだろろうと思いますし、もしなければ岩波文庫に何冊か入っています。

むずかしい漢字や旧式の漢字やあて字がたくさんできてお困りかと思いますが、字書をひくなら、御両親におたずねするなりして根気よくおよみになることをおすすめします。

僕自身今まで時々よんだという程度で精読したことがありませんので、おすすめするのが気恥しいですが、何か一つしっかり読むというと、これくらいのものしかうかびません。又これだけで十分だと思います。ぼくは自然科学の素養が全くないので、寺田さんのものを本当に理解することができないのを、どれくらい残念に思ったかしれません。国語の教師をしていて、いつも痛感することは理科の知識の欠乏で、いつも理科の先生をつかまえては質問ばかりしているのですが、土台がないので散発的で終わってしまいます。

さきほど『平家物語』の有名な那須の与一が扇的を射るところをよんでいますと、舟を源氏のいる海岸に向って横に向けた、とあるのにひっかかったのですが、あなたはこれをどうお思いになりますか。(もし『平家物語』をおもちならこのところをひらいてみて下さい)——これは、そうした方が舟のゆれ方(ピッチングとローリングというのですが)がよけいひどくなって射にくくなるからではないでしょうか。これくらいのことともよくわからぬ貧弱な頭で、自分で自分がいやになりまます。お話が少し脱線してしまいました。それはとにかく、題目のえりきらいをなさらずに、片っ端から寺田さんのものを精読して下さい。自然科学的な要素が多いので、国語の試験の問題としては、ひどく限られたところしか取れないと思いますが、そのうちに何か問題をつくってさし上げま

しょう。

英語の勉強についてはいう資格がありませんが、僕の持論としては、普通のことをいうのには、中学一、二年の英語の教科書にのっている言い方以外のものはめったにないと思うのです。ですから中学一、二年（あるいは三年までよくみて）の教科書を二通りぐらい用意して、それをていねいに（発音も正確に）よみ、英語を日本語に、又その逆をやっていると自然と英語のいい方になれると思います。

それでお互が毎日折りにふれて話している手近かなことを時々英語でかいてみて、どうも英語らしくならないところ（英語で何と書いていいかわからないようなところ）は、しばらくそのままにしておいて、中学のリーダーなり、その程度のやさしい英語の本をよんでいますと、「ああ、いつかのところはこの言い方をすればいいんだ」というところに必ずぶつかります。和文英訳の一番よい勉強のやり方はこれだと僕は信じているのです。中学一、二年のリーダー程度の英文がかければ大したものです。あまりむずかしいものばかり読んでいると、それにとりこにされて、かえって英訳の力はつきません。もしあなたが自分でお考えになって「なるほど」とお思いになったら実行してください。さっきも文化放送で、野原という先生が英文法の講義をしていました。

「何とかに意味四つあり、何とか何とか何とかと何か——サア一緒に言ってください。いいですか。」

「何とかに何とか」はまるでオウムにものを教えているようですね。実にうまいものだと思心しますが、しかしいくら熱心にこの講義をきいても実力はつきません。英語の単語の意味を覚えるのも、「ああそうか」「なるほど」という具合に、一つ一つ自分で発見したのでなくては身につけません。そういう努力をやっている人には野原さんのお話も役に立つでしょうが、苦勞なしに手に入れたのはすぐ失ってしまうものです。いわゆる悪銭身につかず。競輪、競馬、みんな苦勞しないで一べんに大もうけをしようとするわけで、こういうものがやたらに流行っている日本の現状にあなた方若い諸君は全力をあげて抵抗して下さい。ムダな努力をしたってつまらない、といいながら自分は元も子もなくすような大きなムダをやっていることに気がつかないのでしょうか。おしゃべりが長くなって困ります。

サヨナラ！

(3) 志望校のきめ方（昭和三十三年一月六日）

いま友人のところから帰って、机の上にあなた方のお手紙を見出して拝見いたしました。もう十二時近くですが、コタツの上でゆっくり御返事をかこうと思えます。ただし御たずねの御志望校についての意見はあと二日で学校がはじまりましたら、進学指導について研究している先生に相談した上であらためて申上げることにして、今晚はごぶさたのつぐないとして、思いつくまま雑談させ

ていただきます。ラジオの落語でもおききになるつもりでおよみねがいます。といってそれほどおもしろくはおちませんでしょうが。——ぼくの「心をこめた踊り」（註、桑原さんは私の家を訪れた折黒田節を見事に踊ってみせた）をまた見ていただきたいつよい衝動にかられますが、そのあとまだ仕入れていません。その後おぼえたのは馬子唄——小諸（こむろ）節ともいうようですが、それだけです。これは学校で近松の「丹波与作待夜の小室節」というのを教え、その中に「坂はてるてる鈴鹿はくもる、あいの糖山雨がふる」という馬子唄があり、それをうたってきかせる必要を感じたものですから、レコードを買ってきて二三日がかりでおぼえこみ、イッシュウケンメイうたってきかせてみんなをチャームするのに成功しました。あなた方にも今度おあいしたときには是非きいてもらいたいです。自信があるのです。——

年末の三十一日夜行で大津に行き、元日の日は三井寺—石山寺—芭蕉幻住庵趾—瀬田の唐橋—義仲寺をまわり、宇治に行って一泊、翌二日には平等院—日野の法界寺—日野山の鴨長明方丈趾—醍醐寺をみてまわって夜行で帰京しました。正月早々ですのでも人出がなく、楽しい旅行でしたが、元日の日はどの店も休みで、食事をとるところがなく、一日中ほとんど何もたべず歩きまわり、これには少々困りました。記念に俳句を二つ三つつくりたいと心がけましたが、一つもものにならず残念でした。

鴨長明方丈あとにて

空を切つて雉とびすぎつ日野の山

雨にぬるる熊笹寒し方丈趾

(バシ ヨ ウトハ、クラベモノニナラナイ、ダメ、ナツテナイ 4点グライ)

——旅行といえは十月には修学旅行で十和田湖まで行きました。三〇〇名を二班にわけ、一日ずらして別々に出かけましたので、わりに気楽な旅行ができました。法政二高博多駅事件は四〇〇名以上多数のものが集団行動をしたところに事件発生の一つの原因があるのではないでしょうか。それで事件を起こさずにすませるためには、今度はカンシをきびしくしなければならなくなり、オリに入れてケダモノを輸送するような具合になりました。小人閑居して不善を為す、といいますが、群居しても不善をなすようです。ところでぼくの方の修学旅行のことですが、ぼくの趣味であるかぞえ歌をつくって、かえりの車中で発表しまして、カンゲイされました。

一つとせ 人も知つたる千歳っ子奥の細道太い道

二つとせ 二人仲よく差向いひざの上にはショーギ盤

三つとせ 三日三晩のね不足は学校かえって取りかえせ

四つとせ 夜の花巻鹿踊り太鼓のひびきが忘れぬ

五つとせ いつか二人で来てみたい雨の松島船の中

六つとせ 昔のなごりは金色堂金の光はありがたい

七つとせ なつかしいのは十和田湖よ山のもみじや水の色

八つとせ ヤレヤレ旅館におちついたソロソロ活動はじめよか

九つとせ コラコラお前はどこへ行く闇に光った教師の目

十とせ トウトウ東京にかえるのかあすから学校だアーアー

(これでもぼくがうたうと引き立つのです。)

大学進学を目前にひかえてはりつめた気持でいられるあなた方にこんなつまらぬことばかり申上げて何だか気がひけてきました。自信がなくなってきました。

正直のところ、ぼくはあなた方がどの学校に入ろうとあまり問題にしていけないのです。どうころんだって一人前になることはまちがいないのですから(カケをしてもいいです)。ただ一人前ではおもしろくない。二人前、三人前でなければということもありましょう。しかしそれは運任せではありません。できるだけ努力して入れた学校に入る。その学校でできるだけ実力をつける。そしてできるだけ努力して入れた職場で、できるだけ努力する。それしかないように思うのです。あとには運で、その努力している間に人の気のつかないことに気がつければ思わぬ発見、発明もありましょうし、人から信用されて重要なポストについて何人前ものはたらきをしなければならなくなる。ということにもなりましょうが、それは自分でのぞめることではないでしょう。運任せです。文芸春秋の座談会で中谷宇吉郎さんも言っていました。文科系統の人々、特に政治家とかお役人といっ

た人々は自分の実力以上に自分を見せようとする。しかし科学者や技術者は自分の実力相応の仕事しかできない。カライバリしてみてもすぐボロがでてしまう。そういうわけであなた方のすすまわる理工系（科学技術方面）は目を足もとにつけ、足を地につけてコツコツあるいていけばいいのですから、あるいみからいうと気が楽なのではないでしょうか。ただ理工系は学校と採用人員も少く、入るだけでむずかしいのですが、これは日本の学校制度がわるいのであなた方のせいではないのですからどうにもなりません、それにしてもあなた方の志望に添い、そしてあなた方の入れる学校というものが全然ないことはない信じますので、タカをくくってもいるわけです。ただ地理的条件、経済的条件ということもありますので、そうカンタンではないでしょうが多少のムリはやむをえないでしょう。特に茂さんの場合「待ったなし」のようですから、幅広く志望校を選択なさるよう——もうそのおつもりの方ですが——のぞみます。もうあと5年乃至10年たてばあなた方は専門の道のエキスパートでしょう。石の上にも三年と申しますが、御辛抱なさって、小さなたゆまぬ努力をつづけてください。「青年よ大志をもて」というクラークのことを世間は誤解しているようです。これは人マネをするな、ということでしょう。どんな小さなことでも人マネでなく、自分の力できりひらいて行くこと、それには勇気と努力が必要で、それが「大志」というものでしょう。小学生に言うように気がひけますが、大学生になったら決して申しません。今のうちせいぜい子供あつかいさせてもらうことにしますが——たとえば野口英世博士のようになるんだ、というこ

とは決して「大志」ではないと思います。それなら野口博士はだれのようにならうとしたのでしようか。だれかソクケイする人があって、その人のようにならうとしたのかもかもしれませんが、ぼくのみるところではそうではなく、誰も行こうとしないところに一人ですすんで行ったところに野口博士の野口博士たるイミがあるのじゃないでしょうか、大人になるとなかなかそうはいかなくても、青年は世間的評価というものにも背をむけて「おれはおれだ、おれはこの道をすすむんだ」という気概があってもいいのではないか、それをクラーク博士は「大志をもて」といったのでしょう。札幌農学校という地味な学校、多くの青年は末は総理大臣か大将かをめざしていたころ、こんな地味な学校で自分の一生を遠い日本の将来——日本の土地開発というはえない仕事に捧げようとするものに向ってこういったのです。決して大臣や大将や博士になれ、といったのじゃありません。このイミでぼくも——ナマイキでしょうが——あなた方にむかって「ビー・アンビシャス」と申し上げたいのです。もうあとは申上げるだけヤボだと思えますのでやめます。——お送りくださったものありがたくいただきました。須賀夫は休みになると例によって早速大井の姉のところに行き、ぼく一人でノンビリ正月をたのしみました。通信ボは見せません。相変らず1と2ばかりもらったのでしょう。「もう映画をみないでベンキョウしようかな」と、そのときはひとりごとをいっていましたが、大井に行つてからは依然として毎日のように映画をみているようです。先日一緒に風呂に入つてぼくがカガミに向つて顔をあたっていますと、ツクツクぼくの顔をながめていましたが、「お父

ちゃんとは三船敏郎によく似ているな」というのです。思わず顔の赤くなるのを覚えました。子供は正直ですね。しかし学校で生徒諸君にこの話をして意見を求めたら「そっくりだ」という声もかかりましたが、それは心からのものではないようでしたが、あなた方はどう思いますか。御両親さま、弟妹方によろしく。又二三日中に申し上げます。

(暁)

(4) ふりかえってみて(昭和四十六年三月二十日)

.....来春千歳(高校)を辞めますが、若い諸君に接せられなくなるかと思うと、さびしいです。——ほかの教科のことはわかりませんが、ぼく自身は、授業は「発問」だと思ってやってきました。教師の「発問」が生徒(学生)のそれを引き出すきっかけになると一層よいのですが、ぼくの場合、ぼくの一方的な「発問」に終始していることは、ぼくが自分の気の利いた(?)「発問」にばかり気をとられて、相手の「発問」を待つゆとり、に乏しいせいだと思っています。ぼくの場合、その「発問」は主としてテキストの文章に対する疑問もしくは不満に発するもので、与えられたテキストの文のアラ探しということになりがちなのです。それで自分でも気がひけて、「寺田寅彦先生のような稀有な大学者でも、ぼくのようなつまらぬものに揚げ足をとられる思いがいをするのだから、(註、「春のおとずれ」の中の一節)人間というものは謙虚でなければならぬ、自

分をえらしとする前に、自分がつまらぬと思う人の云うことにも耳を貸すべきだ」など言いわけをするのです。お送りしました(試験)問題の一は、生島遼一氏(フランス文学者)の「友情論」で、筆者の気のつかぬ点を指摘しましたのを問題として出したものですし、二の間(三)は清水幾太郎氏の「『が』を警戒しよう」という文のズサンを批判しましたのを問題に出したのです。清水氏は、「しかしながら」の意味の「が」と「のに」とを同じものと考えているのです。——先日、ぼくの教え子と話をした折、彼は「先生は天才意識を持っているか」ときくのです。どういうつもりでそんなことを云い出したのかわかりませんが、ぼくは、天才とか秀才とかいうことばがどれほど人をあやまらせているか、について彼に話したのです。野球で云えば、王、長島は天才だと云い、スモウでいえば、貴ノ花や輪島は天才的だという。天才だからと云ってもオールマイティではなくて、たかが野球とかスモウに限定されているので、天才は無数に存在する。そういう意味では、自分ではわからぬが、ぼくも何かある一つのことにかけては天才かもしれないよ、と云ったのです。脱線したようですが、「天才」とか「秀才」とかいう、やたらに使われることば一つでも、正確に考えられていないということを申したかったです。——中略——

ぼくは月末北海道に出かけます。武蔵野三中のときの教え子が函館に嫁いでいて、一度ぜひ来い、と催促しきりですので、腰を上げることになりました。酔っぱらってこれを書きましたので、シリ、メツレツでしょう。酔ったいきおいで投函します。

勿々敬具

三、 “古典の講義”の一例——「国史の地熱」

これからの講義の主題は、みなさんのお手元に講義資料としてお配りしてあるわけですが、これを一応みなさんが予め目を通して置いて下さると大変話がしやすいのですけれども、恐らく諸君は心身共にその余裕がないだろうと思います。そういうわけで、この講義資料を一応読むだけでも一時間半や二時間はすぐ経ってしまう。そんなことをしていると高等学校の国語の授業をわざわざ雲仙まで聞きにきたのではないと言って怒られそうですが、しかしこれから取り上げます主題について、国語の授業以上にお話をする資格は僕にはないということを痛感しているのです。「なるほど、桑原が言ったのは単なる謙遜ではない。本当だった。」ということ

が諸君にわかっていただければそれでいいわけです。  
前置きはそのぐらいに致しまして、いきなりこの講義資料についてひとつ読んでみたいと思います。

一番最初に挙げてありますのは北畠顕家の後醍醐天皇への上奏文。上奏文という題がついているわけではありませんが、内容はそういうものです。

(資料Ⅰ)

北畠顕家、上奏文(三宝院文書)(原漢文)

鎮将、各々其の分域を知らしむ。政令の出五方に在り、因りて之に准ずる処、故実を弁ずるに似た

り。元弘一統之後、此の法いまだ周く備はらず。東奥之境、わずかに皇化に靡く、是れすなはち最初鎮を置くの効也。西府に於ては更に其の人無し。逆徒敗走之日擅に彼の地を履み諸軍を押し領し、再び帝都を陥る。利害之間此を以て観る可し。凡そ諸方鼎立するも猶ほ聽断に滞り有り。若し一所に於て四方を決断せば万機紛紜、争患難を救はんや。分出して侯に封ずるは三代以往之良策也。鎮を置きて民を治むるは隋唐以還之權機也。本朝之昔八人之觀察使を補し、諸道之節度使を定む。承前之例漢家と異ならず。方今乱後、天下の民心たやすく和し難し。速に其の人を撰び西府および東関に發遣せよ。若し遲留あらば必ず嚙齧の悔あらんか。兼て山陽・北陸等に於て各々一人の藩鎮を置き、便近之國を領せ令め、宜く非常之虞に備ふべし。当時之急之より先なるはなし。

諸國の租税を免じ儉約を專にせらるべき事 (省略)

官爵の登用を重んぜらるべき事 (同)

月卿雲客僧侶等の朝恩を定めらるべき事 (同)

臨時の行幸および宴飲を閑せらるべき事 (同)

法令を嚴にせらるべき事 (同)

政道之益無き寓直の輩を除かせらるべき事

右、政を為すに其の得有る者は、菊苑(舞師・木こりなど)之民といへども之を用ふべし。政を為すに其の失有る者は、閑閭之士といへども之を捨つべし。頃年以來、卿士官女及び僧侶の中、多く機務の竊害を成し、ややもすれば朝廷の政事を躓す。道路目を以てし衆人口を杜ぐ。是れ臣、鎮に在る

の日、耳に聞き心に痛む所なり。それ直を挙げて枉を措くは聖人の格言なり。賞を正しくし罰を明かにするは明王の至治なり。かくの如きの類は早く除くに如かず。すべからず、黜陟ちつしつの法を明かにし耳目の枢ひらを闢くべし。陛下諫に従はざれば、泰平期する無し。もし諫に従はば清肅日有るものか。小臣元書もとく巻を執り、軍旅の事を知らず。忝かたじけなくも綽詔ひびを承け、艱難かたじけなの中を跋渉しりぞす。再び大軍を挙げて命を鴻毛もうぼうに齊ひとしくし、幾度か戦を挑みて身を虎口に脱す。私を忘れて君を思ふ、悪を卻けて正に帰さんと欲するの故なり。もしそれ先非を改めず、泰平致し難くんば、符節を辞して范蠡はんらいの跡を逐ひ、山林に入りて、以て伯夷の行を学ばん。

以前の条々、云ふ所私ならず、凡そ厥その政を為すの道、治を致すの要は、我君久しく之に精練したまひ、賢臣各々之を潤飭じゆんしよくす。臣の如きは後進末学、何ぞ敢へて討議せん。然りといへども粗管見ほぼの及ぶ所を録して、聊丹心いささかの蓄懐のを摠とぶ。書は言を尽さず、言は意を尽さず。伏して冀こひねがはば、上聖の玄鑒くわんに照らし、下愚の懇情を察せられんことを。謹みて奏す。

延元三年五月十六日従二位権中納言兼陸奥大介鎮守府大將軍 臣源朝臣顯家 上

一番最初を見てみますと、妙なところから始まっておりますが、実は前文があつたわけですが、けれども、今そこが破損してなくなつてしまつています。その一番最初のところは、話の都合がありますので、あとまわしにしまして、一番最後のところ、前の頁の終から四行目のところから読んでみたいと思います。

その見出しを読みますと、まず「政道之益無き寓直の輩を除かせらるべき事」とあります。すぐここでわからない言葉が出てきています。この「寓直の輩」という寓直という言葉ですが、その辺の漢和辞典にも出てないのです。しかたがないから僕は自分の当てずっぽうで申しますが、要するに、寄生虫のような人間、そんな風に僕は取ってみます。以下大体読めばわかると思いますので、いちいち説明はしません。終りの行の「是れ臣、鎮に在るの日」といいますのは、彼は鎮守府將軍でしたから、奥州の鎮守府將軍として、奥州の大軍を率いて上京してきたわけです。後の後村上天皇、即ち義良親王のりながを奉じて二度上京して、一度目は足利尊氏の軍勢を京都から追い落とすことに成功したわけですが、また後に足利尊氏が背いて、一旦京都から追い落とされた尊氏は九州へ行くわけです。尊氏は、九州の兵力を糾合して、再度上京してきて、それでもつて和田岬に上陸する。それで、楠木正成は、湊川であえなく戦死をして、尊氏は再び京都を占拠する。そこでもつて顯家が再び奥州の大軍を率いて上京して、今度は事成らずして討死を遂げるわけです。そういうわけで「鎮に在るの日」、つまり奥州の鎮守府將軍であつた時に、朝廷の政治がうまくいっていないということに耳に聞き——「心に痛む所なり。それ直を挙げて扞を措くは聖人の格言なり。」これを読むと、聖徳太子の十七条憲法を思い出します。聖徳太子の憲法第二条、「其れ三宝に帰せずんば、何を以てか扞まがれるを直たださむ。」とあります。太子の十七条憲法というものは顯家の頭の中にはつきりあるわけです。十七条憲法の

お言葉は、ここでは省略しましたほかの箇条にも出ているのです。後の頁の三行目、「小臣元書巻を執り、軍旅の事を知らず。(自分は北畠という文官の家に生まれた人間で、本来の武官ではないのだ。) 忝くも綽詔を承け、艱難の中を跋涉す。再び——」「再び」というのは、さっき言ったように、一度は尊氏を九州に追い落とすことに成功した。それで、とつて返した尊氏をまた討つために再び奥州からはるばる大軍を率いて上京してきたわけです。それで「再び」と言っているわけです。「再び大軍を挙げて命を鴻毛に斉くし——」「軍人勅諭にこういふ言葉があるということを諸君はよくご存じだろうと思います。「幾度か戦を挑みて身を虎口に脱す。」(何遍かあぶないと欲するの故なり。——「私を忘れて君を思ふ、悪を卻けて正に帰さんと欲するの故なり。——「私を忘れて君を思ふ」というのは、やはり太子の十七条憲法の「私に背きて公に向ふ」というお言葉、あれを蹟家は自分の身にひきよえててこういうふうに言い換えたのだと思います。「もしそれ先非を改めず、泰平致し難くんば、符節を辞して范蠡の跡を逐ひ、山林に入りて、以て伯夷の行を学ばん。——」「符節を辞して」、つまり、鎮守府將軍を辞めて、それで、范蠡(越の勾踐こうせんを助けて功績があつたが、功成つた日、自ら身を民間に落として商売人になつた人)、伯夷(弟の叔斉とともに周の粟を食うのを恥じて首陽山でわらびを食つて飢死した人)そういう人間の跡を追いたいと言っているわけです。

以上、ずっと述べてきて、最後に「以前の条々、云ふ所私ならず。」と書いてある。「私なら

ず」ということをくり返しておりますね。最後の「延元三年五月十六日從二位権中納言兼陸奥大介鎮守府大將軍 臣源朝臣頭家」北畠というのは源、村上源氏です。延元三年というのは一三三八年、この延元三年五月十六日というのは頭家が戦死するちようど一週間前です。一週間前に、いわば遺書としてこれを書いた。すでに死を決しておったわけです。今僕は「死を決しておった」と言いましたけれども、死を決するなんていう、そんな暇はなかったのだろうと思うのです。短い生涯、この時頭家は数え年で二十一才。僕なんかは生きるとか死ぬとかいうことを區別して考えるのですね。頭家なんかの場合は、生きているといふことは死を追い越している、死ぬといふことは死に追いつかれ、追い越されたといふ、いつも死といふものとかかけつぐらをしていっているといふ、そういう生涯でしょうか。これを僕は今から三十年位前に見た時に非常な感銘を受けたわけです。僕は非常なぼんくらですからね、非常に。ものをパッと掴むということはできない人間で、歴史とか歴史観とかいふものであつちへ行つたりこつちへ行つたりして、頭ではいわゆる唯物史観なんてつまらないといふふうに思つていますけれども、どうしても気持がそつちの方に傾いてみたり、ぐらぐらしている。物的生産力がどうかこうとかいふようなことに。だけど、これを読んで歴史といふものがはつきりわかつた気がした。歴史をつくるのは人間なのです。人間の精神なのです。あたりまえのことです。物的生産力といへども人間の精神がつくるものです。精神が精神を喚び起こす。生命は生命を呼ぶ。これが歴史

の原則だ。そういうふうには僕は腹が決まった感じがしました。

これだけお話しただけで、諸君はすぐこの顕家という人物は劇の主人公だと思われるでしょう。僕自身がそう思っているわけです。非常に感激し、感銘を覚える。一般の歴史家は、「舞台のお芝居を見て泣いたり喜んだりしているのは馬鹿だ。もつと大事なことがある」とか言って舞台を見ないで楽屋に廻って、今舞台で演技をしている連中はけさの昼めしには何を食ったかなんて調べて……。それも一応大事ですよ、腹が減っては芝居もできませんからね。しかし、うまいものを余計食ったからといって、立派な芝居ができるわけではないということはまた疑いのないことなのです。

それでは、前に戻りまして、一番最初です。さっき申しましたように、これは前文が欠けておるんです。途中から始まつております。一言一句説明しておりますと時間がかかりますので、大ざっぱに読むだけ読んで、あとで大体こういうことを言っているのだというように申してみます。つまり、すべて中央でやつておつたのでは間尺に合わない。中央と東西南北にそれぞれ藩鎮を置いて、ときはき事をさばくようにしたい。それを彼は奥州の鎮守府將軍としてやつてきたわけです。それで、西でも、更には東関、北陸、山陽にもそういうものを置いてもらいたい。こういうことを言っておるわけです。

それで、顕家の申しましたことがすぐ採用されて実現される。それを示したものに『太平

「記」卷第二十の「奥州下向勢難風に逢ふ事」という記事があります。読んでみます。――

(資料Ⅱ)

太平記卷第二十から

○奥州下向勢難風に逢ふ事

吉野には、奥州の国司安部野にて討れ、春日少将八幡城を落されて、諸卒皆力を失ふといへども、新田殿北国より攻め上る由奏聞したりけるを御慝あつて、今や今やと待ち給ひける処に、此人さへ足羽にて討れぬと聞えければ、蜀の後主の孔明を失ひ、唐の太宗の魏徵に哭せし如く、鞞襟更におだやかならず、諸卒も皆色を失へり。爰に奥州の住人、結城上野入道道忠と申しけるもの、参内して奏し申しけるは、国司顕家卿三年の内に再度まで大軍を動して上洛せられ候し事は、出羽奥州の兩國、みな国司に従て、凶徒其隙を得ざる故也。国人の心未だ変せざるさきに、宮を一人下し進せて、忠功の輩には直に賞を行はれ、不忠不烈の族をきり葉をからして、御沙汰候はんには、などか攻め従へては候べき。国の差図を見候に、奥州五十四郡恰日本の半国に及べり。若し兵数を尽して一方に属せば、四五十万騎も候べし。道忠宮を挟み奉て、老年の首に冑を頂く程ならば、重ねて京都に攻め上り、会稽の恥を雪めん事、一年の内をば過し候まじと申しければ、君を始め奉て、左右の老臣、悉く此議げにも然るべしとぞ同せられける。之に依て、第八宮の今年七歳にならせ給ふを、初冠めさせて、春日少将顕信を捕弼とし、結城入道道忠を衛尉として、奥州へぞ下しまるらせられける。是のみな

らず、新田左衛佐義興、相模次郎時行二人をば、東八箇国を打ち平げて、宮に力を副へ奉れとて、武蔵相模の間へぞ下されける。陸地は皆敵強うして通りがたしとて、此勢皆伊勢の大湊に集て、船をそるへ風を待けるに、九月十三日の宵より、風やみ雲収つて、海上殊に静りたりければ、舟人纜をといて、万里の雲に帆を飛す。兵船五百余艘、宮の御座船を中に立て遠江の天竜灘を過ける時に、海風俄に吹あれて、波浪忽に天を巻き翻す。或は楫を吹き折られて弥帆にて馳る船もあり、或は梶をかき折つて、廻流に漂ふ船もあり。暮れば弥風あらく成つて、一方に吹も定まらざりければ、伊豆の大島、女良湊、かめ河、三浦、由比浜、津々浦々の泊りに、舟の吹き寄せられぬはなかりけり。宮の召されたる御舟一艘漫々たる大洋に放たれて、已に覆らんとしける処に、光明赫突たる日輪、御舟の船前に現じて見えけるが、風俄に取て返し、伊勢国神風浜へ吹もどし奉る。若干の舟共行方もしらず成ぬるに此御船計日輪の擁護に依て、伊勢国へ吹もどされ給ひぬる事ただ事にあらず。何様此宮継体の君として、九五の天位を踐せ給ふべき所を、忝も天照太神の示されける者也とて、忽に奥州の御下向を止られ、則ち吉野へ返し入れ進せられけるに、果して先帝崩御の後、南方の天子の御位をつがせ給ひし吉野の新帝（後村上天皇）と申し奉りしは、則ち此宮の御事也。（注II金勝寺本太平記によると、新田義興の乗船は、武蔵国石浜に漂着したといふ）

実は、僕は『太平記』にも不満があるので。『太平記』がなければ、何にも言えないわけなのだけれども、どうも高い調べというか、調子の高い所がどうも足りないように思います。

それで、『太平記』などを材料にして、諸君一人一人がゲーテかシェイクスピアになつたつもりで、頭の中で大きなドラマを描いてもらいたい。そのドラマの材料を僕は提供している。そういうつもりなのです。

さて、ここで、前の頁の終りあたりに書いてある通り、第八皇子義良親王をいただいて、それに補佐として顕家の弟の顕信がつく。それから、参謀として結城入道道忠がつく。それで、兵船五百艘でもつて奥州にむかつて出発したんだが、その中に、新田義興、相模次郎時行という名前が出ております。さて宮の御座舟、それに顕信も乗っているわけですが、それは伊勢の国に吹き戻された。それならば、新田義興とか相模次郎時行の舟はどうなつたかという疑問が起きるでしょう。そこで最後に「注」を入れておいたわけですけれども、『金勝寺本太平記』では、新田義興の乗船は、武蔵国石浜、隅田川の河口だと思われませんが、そこに漂着したという。これは事実だろうと思います。義興はのちに東国、相模、武蔵で活躍しておりますからね。それから、顕家、顕信兄弟のお父さんの北畠親房がこの時やつぱり一緒に東国に船で下つているわけですが、親房の名前は『太平記』の記事には出ておりません。しかし、親房自身の書いた『神皇正統記』にそのことが出ていているわけです。それを読んでみましょう。

(資料Ⅲ)

北畠親房「神皇正統記」から

さてしもやむべきならずとて、陸奥の御子(義良親王)又東へむかはせ給ふべき定めあり。左少将頭信朝臣中将に転じ、從三位に叙し、陸奥の介鎮守府將軍を兼ねてつかはさる。東国の官軍ことごとく彼の節度にしたがふべき由を仰せらる。親王は儲君(皇太子)に立たせ給ふべきむね申しきかせ給ふ。「道の程もかたじけなかるべし。国(陸奥)にてはあらはさせ給へ」となん申されし。異母の御兄もあまたましましき。同母の御兄も前の東宮、恒良親王、成良親王、成良親王ましまししに、(前後して高氏毒殺)かくさだまり給ひぬるも天命なればかたじけなし。七月の末つかた、伊勢にこえさせ給ひて、神宮に事の由を啓して御船をよそひし。九月のはじめともづなを解かれしに、十日ごろのことにや、上総の地ちかくより空のけしきおどろおどろしく、海上あらくなりしかば、又伊豆の崎と云ふ方にただよはれ侍りしに、いとど浪風おびただしくなりて、あまたの船ゆきかた知らずはべりけるに、御子の御船はさほりなく伊勢の海につかせ給ふ。頭信朝臣はもとより御船にさぶらひけり。同じき風のまぎれに、東をさして常陸国なる内の海につきたる船はべりき。(親房自身のこと)方々にただよひし中に、この二つのふね、同じ風にて東西にふきわけられける、末の世にはめづらかなるためしにぞ侍るべき。儲の君にさだまらせ給ひて、例なき御すまいもいかがおぼえしに、皇太神のとどめ申させ給ひけるなるべし。後に芳野へ入らせましまして、御目の前にて天位をつがせ給ひしかば、いとと思ひあはせられ、たふとく侍るかな。又常陸国はもとより、心ざす方なれば、御志ある輩あひはからひて義兵はくなりぬ。

これで見ると、常陸国に行くつもりだった。それで、船が流されたんだけど、最後に書いてある通り、やはり目的地の常陸国に着いているわけです。霞ヶ浦に着いて、それから常陸の小田城へ。小田城でもつてこの『神皇正統記』を、このことがあつた翌年の十一月に完成している。敵の包囲の中にあつてろくに参考書もなくて。それから征西將軍宮懐良親王かねなががこの時やつぱり同じ頃に九州に向つて出発していると思われます。それで、懐良親王は義良親王の弟宮でこの時七才、あるいは十一才といろいろ説があります。ところで、懐良親王がお一人でもつて行かれるわけではないでしょう。やつぱり誰か、有力な人がついていったに違いない。最近僕は気が付いたのですが、菊池武光の軍勢の中に、名和長年の一族と新田義貞の一族が出ています。彼等が懐良親王に付き添つて九州へ行つたに違いありません。さらにまたさつき読んだ『太平記』には出ておりませんが、義良親王の兄宮である宗良親王がやはりこの時同時に船で出発しているのです。それは宗良親王ご自身の歌集、『李花集』に出ているのです。読んでみま

(資料Ⅳ)

宗良親王「李花集」から

延元四年（実は三年）の秋の頃にや、伊勢より船に乗りて、遠江へ心ざし侍りしに、天竜の灘とか

やにて、浪風なべてならず荒くなりて、二、三日まで沖にただよひ侍りしに、友なる船どもみなここかしこにて沈み侍りしに、からうじて、しろわの湊といふ所へ浪にうちあげられて、われにもあらず船さしよせ侍りしに、夜もすがら波にしをれて、いとたへがたかりしかば、

いかで干すものともしらず苦くるしみやかた片敷く袖のよるの浦浪

「伊勢より船に乗りて、遠江へ心ざし侍りしに、天竜の灘とかやにて——とありますが、やっぱり宗良親王はご自分の経験を言っているのだから、「『太平記』の『天竜の灘』は間違いで、上総の国近くなつてからという、『神皇正統記』の方が正しいのだ。」とは言えない。船が前後して行っているわけです。親房の船が一番先頭を走っていたのでしよう。親房が自分のえらい経験を「常陸の国につきたる船はべりき」なんて、まるでひとごとのようにわずか一行で済ましています。宗良親王もそうです。こういう簡単な詞書と、風雅な歌一首だけをとどめているにすぎないのです。遠江の国しろわの湊というところに打ちあげられたというのですけれども、宗良親王は初めてこの地へ下られたものではありません。もう前々から遠江の国、例の有名な井伊城におられたのです。頭家が奥州から大軍を引き連れて上京する途中で、遠江の国で頭家に合流したわけです。それで頭家戦死のあと、吉野にとどまっておられたのだけれども、再び遠江の国に赴くわけです。そして「遠江へ心ざし侍りしに」とありますから、やはり

宗良親王も目的地に着いたわけです。

以上のことをまとめるとこうなります。とにかく、顯家の上奏に従って、各地方にそれぞれ宮たちを派遣したわけで、台風の目にぶつかってちりぢりばらばらになったのだけれども、一番中心である義良親王、顯信の乗っておった船だけは伊勢の国に吹き戻された、だが、そのために御父後醍醐天皇崩御に間に合った。親房は目的地である常陸国に着いている。宗良親王も目的地である遠江国に着いている。もちろん、征西の宮、懷良親王は九州に着いている。だから、不思議だ、不思議だというのも無理はないと思います。さっき申し上げましたように、僕が提供した材料をもとにして諸君は諸君の頭の中でひとつ壮大なドラマを描いてもらいたい。もしもこういう事実には諸君が多少なりとも感銘を受けるならばですね。

さて、こういうことを読んできますと、いわゆる南北朝の争乱というのは、北朝と南朝と、天下の取りつくりをしたんだ、それで南朝が負けたんだというふうな気がしないのです。高い目、大きな目でみると、源平の合戦とは違う。次元が違うというふうに思うのです、僕は。兵船五〇〇艘、陸地は敵が充満して危いので、五〇〇艘——これは話半分としても——かなりたくさんさんの船で東国へ行き、あるいは西へ行ったわけです。ちょうどこの時分から、いわゆる倭寇というのがさかんになっております。日本の武装商船隊が、初めのうちは朝鮮、それからだんだんに南支那まで押しかけた。ちょうどこの倭寇が活躍した時期と、いわゆる南北朝の争

乱という時期とが一致しているのです。南北朝の合一をやった三代將軍義満が倭寇を鎮圧する。それで、明から「お前を日本の国王にする。」と言われて、彼が喜んだという話があるが、南北朝対立期と「和寇」の全盛期とが一致しているわけです。よく倭寇が乱暴狼藉を働いたというのですけれども、こちらから出て行かなければむこうからこられるでしょう。この数十年前に、元寇Ⅱ文永・弘安の役があつて、高麗を手先にして元の国が日本に攻めてきたでしょう。その反動なのです。この倭寇というのは。むこうから来る先手を打つて、こちらから行つてやれということで、大体九州あるいは瀬戸内海沿岸の者がみんな出かけて行つたわけです。乱暴狼藉を働いたというのは結果なのであつて、その前に、みんな命がけで行つています。まず第一に自分の命を投げてかかつているのです。僕は別に、倭寇は全部南朝方なんだと云うつもりはない。しかし、倭寇を取り締つてもらいたいということを征西將軍懷良親王のところへ明の国から言つてきて、征西將軍懷良親王はこれを拒否しているわけです。倭寇の背後には、征西將軍懷良親王がいるのだというふうにむこうでは思つておつた。また事実、懷良親王あるいは菊池氏と和寇とはかなりつながりがあつたに違いない。

それで、僕はこれもつい最近思いついたので、これも高いというか、大きいというか……自分で思いついたことを高いとか大きいと言うのは大變僭越だけれども、まあそれでも言わないと気が済まないから言うのだけれども、この和寇というのは大きな目で見ると幕末の尊王攘夷

に先立つ運動ではなかつたか。それは幕末の尊王攘夷への大きなプロセスというものを示していると考えられる。国民的自覚というものは、ちようどこの時代に起つています。これはもう間違いないことです。あるいは南北朝も足利との天下の取りつくらというふうな形で始まったかもしれないけれども、しかし、今まで顯家に関していろいろ読んでみて感ずることは、もうそんな天下の取りつくらなんていうことではなくて、次元が違う。もつと大きな戦いを彼らは戦つていた。それは、日本の国が唯一の中心に向つて固まつて、それでもつて外からの侵略にあたらうという、こういう戦だというふうには僕は感ずるのです。先ほど顯家が聖徳太子の十七条憲法というものはつきりと頭に入れておつて、あの上奏文を書いているということを示しましたね。その証拠もいくつか申したわけですが、日本の国を本當に動かしてきたのは——まあたくさんいるわけですが——聖徳太子です。それから楠木正成だろふと思ひます。聖徳太子が日本の国をずつと今日まで精神的に動かしてきている。その聖徳太子の精神を受け継いだのが正成なのです。これは地理的に言つても、聖徳太子のご廟のある磯長のすぐそばで正成が生まれ育つた。河内の国のね。つまり、聖徳太子のお墓守りといった立場におつた人が正成ですが、実は、正成というのは聖徳太子の分身だと言つてもいいだろふと思ひます。その正成が戦死してからちようど一〇〇年頃の室町時代の寛正元年、建仁寺の坊主の、あれはなんと呼んでいいのか「太極正易」（「タイキヨクシヨウエキ」と読むのかもしれない）の『碧

山日録』というのがあります。正成が死んでちようど一〇〇年頃です。彼は「楠木某が掴まつて首をはねられた。ざまあみやがれ。正成がさんざつばら悪いことをした報いなのだ。」と言っているのですね。「積悪の報いなのだ」と言っているのです。諸君、どういふふうにこれをお思いますか。逆賊。僕は非常にうれしいと思えますね。やつぱり本当の人は逆賊扱いされるといふことではないのですか。初めから百パーセント「あれは立派な人間だ。忠臣義士だ。」なんて、そういうことではないのです。やつぱり逆賊と呼ばれるといふこと。シェイクスピアのハムレットですね。ハムレットは諸君はよくご存じでしょうけれども、最後に倒れますね。自分の愛しておつたオフィリアの兄さんの切つ先に毒が染められている。それでハムレットが倒れる。そうすると、彼の親友のホレーショというのがハムレットのあとを惜しんで、ハムレットのお母さん、すなわちお妃が半ば飲んで倒れた、その飲み残した毒盃をあおろうとする、ホレーショが。そうすると、それをハムレットがとめる。「自分が死んだあと、どんな汚名を受けるかわからない。お前はおれのあとを追つて死にたいだろう。しかし、その永遠の眠りにつくのはしばらく我慢して、もう少し生きながらえてこのハムレットの物語を。」と言つてハムレットは倒れているわけです。実は、そのホレーショというのはシェイクスピア自身だろうと僕は思うわけです。正成の場合、『太平記』というのがあつて、広く読まれておつた書物ですから、それを読んでいれば、正成の積悪の報いでその子孫もこのざまだとは誰も思わない。

だがそう思うのは、今日の僕らがそう考えるだけで、あれは作り話で実は正成はひどい奴なんだ、という声もあつたのです。ハムレットが倒れて、ホレーショに「おれのありのままの物語を、ハムレットの物語を世に伝えてくれ。」と言っている。そのそばから、汚名を着せられる第二、第三のハムレットが現われる、従つて、いつでもシェイクスピアを必要とする、そんなふうな感じがいたします。だからこの『碧山日録』の言っていることは、却つて僕にはありがたいと思うのです。逆賊呼ばわりされることのない忠臣、そんなものはない。初めから、世間から「忠臣義士だ」なんてちやほやされるなら、誰だつてなりませんよ。僕だつてなりたいですよ。

(東京都立千歳高等学校教諭)

四、 “考える国語”の「試験問題」・三例

(1) 高校一年生への出題 “現代国語” (昭和四十六年三月九日)

一 次の文について、あとの問いに応じなさい。

友情については、古来、多くの人の残したことばがあるはずですが、「友情論」といった書物もいくらかはあるようです。友情ということに懐疑的な意見もありません。ギリシャの哲学者アリストテレスは、「おお、わが友らよ、友ひとりだになし。」といつも口癖のように言っていたといわれます。これは真の友というものが非常にまれであるという意味のことだと思えます。フランスの思想家モンテーニュは、その有名な「随想録」の中に、「友愛」についてさまざまの考察を行なっています。彼の結論をいえば、人生でこれほど貴重な宝はないのです。「自然が人間に与えている諸種の和合の中で、友愛に比すべきものは一つとしてない。」(生島遼一(フランス文学者)の「友

愛論」)

問 右の文についての感想を述べた次の文の□内に入れる適当な語句を書け。

アリストテレスにしてもモンテニユにしても、友人というものを人間和合の最高のものと考えていることにはわりはない。そのことは彼等だけのことではなく、ヨーロッパ人一般の考え方を代表していると思われる。英語のフレンドについてオックスフォード辞典に「相互に、いつくしみと親しみとによって結ばれたもの」とある。したがってフレンドを「友だち」と訳すのは必ずしも当っていない。日本語の「とも」は広くは「①もの」という意味だからである。それはむしろ英語の「②」に該当する。日本では無二の親友との親しさをいいあらわすのに、「ほんとうの③」にまさるとも劣らぬ」などという。英語ではその親しさを、フレンドの一語に含ませている、つまり個人対個人の関係でとらえているわけである。ここにもヨーロッパの「④」主義的考え方と日本の「⑤」主義的考え方が示されている。

二 次の文について、あとの問いに応じなさい。

アカデミー・フランセーズで、ある時、会員から「①」割りに義捐金を集めたことがあった。「②」めきって「③」定してみると、三十七人が六フランの銀貨を一枚ずつ醸金した

はずなのに、銀貨は三十六枚しかない。ところが会員の中にけちんぼうをもって天下に鳴り響いている男がいたので、みんなの視線はいっせいにその男のほうに④がれた。しかしその会員は、「ほくは確かに醸金したよ。」とがんばって一步もひかない。そこで金を集めて歩いた会員は、「あの人が醸金するのをわたしは見なかったが、しかし信ずることにするよ。」とつぶやいて不承不承⑤得したが、一座の空気がすっかり白けてしまった。するとフォントネルが大きな声で叫んだ、「ほくはあの人が醸金するのを確かに見たよ、しかしどうも信じられん。」そこで一座の緊張がほぐれて、みんながホッとしたという。こういうのを機知（フランス語でエスプリ）と呼ぶのである。人の意⑥に出て言いたいことを言うのである。

問(一) ①～⑥に適切な漢字を書け。

問(二) 文中の波線部の「信じられん。」は、何が信じられん、というのか。

問(三) 接続助詞「が」について説明した左の文の□内に傍線②③④のどれを入れるか。

「が」は何かことわりをいう場合に用いられるものである。ところで「が」の前で述べ

ること、その後で述べることとの間にずれのある場合、おのずから「しかしながら」「にもかかわらず」というニュアンスが出てくる。そのずれをはっきりさせたければ「ア」のいい方になる。前と後でいうことの間、ずれ以上のくいちがいがあり、そのくいちがいを問題とする場合には「ガ」でなくて「イ」を用いる。したがって、「ウ」や「エ」を「オ」にいいかえるのは適當ではないが、「カ」を「キ」のいい方にしてもさしつかえはない。

三 次の文について、あとの問いに応じなさい。

消費財の生産・供給の流れが細かった時代には、個人の住宅の中に相当量の物資をたくわえておくことが必要だったし、また、衣料などは最後まで繕い、使いきるべきものであった。しかし<sup>①</sup>現在では事情が全く違ってきている。た<sup>②</sup>るでし<sup>③</sup>ふ<sup>④</sup>ち<sup>⑤</sup>を<sup>⑥</sup>買<sup>⑦</sup>う<sup>⑧</sup>家<sup>⑨</sup>は<sup>⑩</sup>ないし、自動車をもつ人の家にガソリンのストックはない。かつて主婦の夜なべの手を待った古くつしたの山はどこかに消えうせた。わたくしたちは、<sup>⑪</sup>明治大正ころの、のんびりした大きな構えの家に住むのではないのだから、家庭内のストックは必要最小限にとど

めるべきだ。<sup>㉔</sup>その代わりに、市場には豊かなストックがある。

ただし、これはあくまで個人あるいは家庭の[ア]度での話である。家庭の米びつの[イ]小に反比例して中央食糧倉庫を強化し、非常事[ウ]下の配給のための[エ]動力を整備する必要はいうまでもない。また、使い古しのきれ地、あきかん、あきびんなどが家庭からどしどし[オ]出されるとき、社会には、それらを集め、選別し、再配分し、再生産する機[カ]が確立されなければならない。豊かな市場は当然ほう大な原料を食いつぶしているし、すべての原料は有限だからである。

問(一) [ア]と[カ]に入れる漢字を書け。

問(二) 傍線部①について、事情はどのように違ってきたというのか、なるべく文中の語を使って説明せよ。(二十字以内)

問(三) 傍線部②について、明治・大正ころの人が必ずしも、のんびりとした大きな家に住んでいたわけではない。それでこの語を取って、どのようにいいかえたらよいか。

問(四) 傍線部③はか、つ、こに入れたほうがよい。なぜか。

(2) 高校二年生への出題 “現代国語” (昭和四十七年十二月十三日)

一 次のシエクスピア「ジュリアスシーザー」(福田恆存訳)の一節についてあとの問いに答えなさい。

アントニー おお、偉大なるシーザー? かくもみじめな姿に? もろもろの領土と栄冠、数々の勝ちいくさやぶんどり品、今それらすべてがこの小さな殻からの中に納まってしまったのか? ご冥福を祈ります。(立ちあがり) おれは知らぬ、きみらが何を考えているのか、ほかにまだ血を流さねばならぬ者がいるのか、とすればだれの血がほしいのか、ほかでもない、おれの血が所望だと言うなら、たった今シーザーの最期の時をのがして他に適当な時はないはずだ。<sup>①</sup> また用いるにしても、その刃やいばほどふさわしい武器は容易に見つかるものでもあるまい。この世の最も尊い血潮につかつたきみらの剣ほどに。こちらからお願いする、もしおれという者が気にくわぬのなら、今すぐ、その朱あけに染まった手から生臭いにおいの消えぬうちに、どうにでも好きなように

してくれ。おれとしても、この後千年生きようと、今ほど喜んで死ぬ気になれる時は来まい。<sup>②</sup>これほど望ましい死に場所はない、また死に方もない、シーザーのそばに、しかもきみらの手にかかって殺されるのだから、この世の華、<sup>はな</sup>時代の鑑<sup>かがみ</sup>ともいうべききみらにだ。<sup>③</sup>

ブルータス　まあ待て、アントニー、きみの死をおれたちに要求する法はない。なるほどわれわれが血を好む凶悪無惨の徒に見えるかもしれないが、それはこの手によって、そしてこの眼前の行為によって、事を判断しようとするからだ。きみはわれわれの手しか見ない、その手のやった血まみれ仕事しか見ない。われわれの心を見てはくれないのだ。<sup>④</sup>その心は思いやりでいっぱいなのに。非道に苦しむローマのいたましい姿を思いやる気持ち<sup>⑤</sup>が——あたかも火が火を打ち消し、思いやりが思いやりをおしのけるように——われわれにシーザーを忘れさせ、この拳にいでしめたのだ。相手がきみとなれば、このおれたちの剣は鉛の切っ先でしかない。わかってくれ、マークIIアントニー。シーザーの暴政を激しく憎んだおれたちの腕が、そして何よりも、あらゆるローマ人を兄弟のごとく愛するおれたちの胸が、きみを迎え入れようとしているのだ。

この上ないあたたかい友情をもって、好意と尊敬の念をもって。

キャシアス きみのことばはだれよりも尊重するつもりだ、それぞれ改めて地位を決める場合にな。<sup>⑦</sup>

ブルータス ただしばらく待っていてもらいたい、われわれはこれから、不安のために混乱している群衆をしずめに行かねばならないのだ。そのあとで一部始終を聞いてもらおう、なぜこのおれが、シーザーをたおす瞬間にもなお愛していたおれまで、あえてこの挙にいでざるをえなかったか、そのわけを。

アントニー きみらの深慮を疑うつもりは毛頭ない。さあ、みんな、その血にぬれた手をくれ。まず最初にマークス・ブルータス、きみと手を握ろう。次はケイアス・キヤシアス、きみの手をいたどころ。さあ、ディーシアス・ブルータス、きみの手も。今度はきみだ、メテラス。きみも、シナ。それから勇敢なるキャスカ、きみの手も。<sup>⑧</sup>

最後に、しかし劣らぬ友情をもって、きみの手を、トレポニアス。ところで、みなに、いや、どう言ったらいいのか？ おれに対する信用の足場はひどく居ごこちのわるいものだ、きみらのおれを見る目は二つに一つ、それがいずれも悪名<sup>⑨</sup>、つまり腰

抜けか阿諛追従あゆついでいしょうの徒か、そのどちらかにちがいない。わたしはあなたを愛していた、

シーザー、それに偽りは無い。それだけにあなたの靈魂が、今もしわれわれをながめておられるなら、この事態を、おのれの死にもまして痛切な悲しみと受け取らぬでもあるまい。それ、こうしてあなたのアントニーはてもなく敵と和を講じようとしているのだ、あなたの敵の、血にまみれた指ゆびを握にぎってまで、ああ世にも高潔なるものよ！ しかも、そのあなたのしかばねの前で。もしこのアントニーに、その無惨な傷

[11] ほどにも多くの [12] があるならば、その [13] のほとばしりほどにも激しい [14] に

むせぶほうが、このわたしには、はるかにふさわしいとふるまいと言えよう。少くともあなたの敵と友情を誓い合うよりは。お許しいただきたい、ジュリアス！ ああ、ここにあなたは追いつめられたのだ、雄々しい鹿の王さながらに、ここにあなたはたおれたのだ、そして今なお、ここにその獵人たちは立っている、そぎきとったあなたの皮

膚をあかしに、あなたの生き血に朱と染まって。ああ、この大いなる世界、おまえはこの鹿の王を迎え入れる森だった。この大鹿こそはおまえの心臓だったのだ。そっくりそのままではないか、貴人の群れに追い立てられ射殺された鹿のように、そうして



ぜか。

問(八) 傍線部⑨の「悪名」は適當ではない。他の語(たとえば「悪意」など)にかえるほうがよい。なぜか。

問(九) 傍線部⑩で「指」とあるのはどういふわけであろうか、前のほうでは「手」となっている。原文は *the bloody fingers* である。複数になっていることに注意せよ。

問(十) [11] ~ [14] に入れる適當な漢字(一字)を書け。

問(十一) 傍線部⑮の原文を示せ。ただし左の解答文の [ ] の中に左記の語の記号をえらび入れればよい。(a) *lethe* (b) *Sign'd* (c) *spoil* (d) *crimson'd*

[ 1 ] in thy [ 2 ] and [ 3 ] in thy [ 4 ]

問(十二) シェクスピアの四大悲劇は何々か。

問(十三) *Put out the light, and then put out the light* という文句は、その四つのうちどれにあるか。

二次の文についてあとの問いに応じなさい。

デカルトはその著『』<sup>①</sup>の中で、彼が青年のころどういふ勉強をしたかを詳しく述べているが、そのころのすぐれたある学校でいろいろな書物による知識を学んだ後——ついでにいえばこれ<sup>②</sup>もその当時のある意味の常識にほかならない——それらがみな根底の疑わしいものであると考へて、「書物による学問を全くやめ、自分自身のうちに、あるいは『世間という大きな書物』のうちに見出されうべき学問のほかは、どのような学問も、いっさいもはや求めまいと決心して、旅行するため、宮廷や軍隊を見るため、さまざまの気質や境遇の人々をたずねるため、いろいろの経験をつむため、運命の与える事件に出あつて自分を試練するため、いたるところで眼前に現われる事物について、何か利益をひき出せるような反省をするために、青年時代の残りを費やした。」といつている。結局デカルトは書物による常識のいかげんな真实性にあきたらず、直接に自分の目でものを見、自分の理性でものを考へて、いっさいの事物を判断しようという大胆な決意をいだいたことになる。すこし先のほうで、彼は「わたしは自分の行動において明瞭<sup>④</sup>に見るために、現世を確実に歩むために、真と偽とを識別することを学ぼうといふ最大の欲望を絶えず保ち続けた。」と書いているが、これは言い換えると、実人世の

体験をとおして「良識」<sup>⑤</sup>をはたらかせ、それを育てていくことを常に心がけたというところにほかならない。「良識は生まれながらにだれでももっている。」と彼はいつているが、それを育てることを絶えずやったというのだから、良識も成長・進歩するものであることがわかる。

さて、デカルトが、良識の鍛練のために本を捨てて実世間にとび出し、旅行や従軍をしたということは、西洋の思想史を少し学んだ人々にとっては「常識」であり、そのことを今初めて知った人々にとっても、何度か読んだり聞いたりしているうちには、やがて常識<sup>⑥</sup>になってしまふ。また<sup>⑦</sup>そういうことを知らなくても、そんなことはべつに恥ではない。常識はそういうものである。しかし、今仮に、デカルトが本を捨てて、旅行その他の体験をもっぱらにする決意をしたということは、はたして正しいかどうかと疑いをいただいた人があるとする、それはもはや「7」識の問題ではなく、「8」識の事柄に移ってくる。それはデカルトのとった道が正しいか否かの判断だからである。(市原豊太氏の文による)

問(一) 傍線部①の書名を書け。



(3) 高校三年生への出題 “現代国語” (昭和四十三年六月十三日)

一 次の文についてあとの問いに応じなさい。

おとうさん、今まで旅行のうちでいちばん悪かった宿屋はどこ。

そうさな、べつに悪いというわけでもないが、九戸の小子内の清光館などは、かなり小さくて黒かったね。

こんななんでもない問答をしながら、うかうかと三、四日、汽車の旅を続けているうちに、鮫の港に軍艦がはいって来て混雑しているので泊まるのがいやになったという、ほとんど偶然に近い事情から、なんということなしに陸中八木の終点駅まで来てしまった。駅を出てすぐ前のわずかな丘を一つ越えてみると、その南の坂の下がまさにその小子内の村であった。

ちようど六年前の旧暦盆の月夜に、大きな波の音を聞きながら、この寂しい村の盆踊りを見ていた時は、またいつ来ることかと思うようであったが、今度は心もなく知らぬ

間に来てしまった。あんまりなつかしい。ちょっとあの橋のたもとまで行ってみよう。……なるほど、<sup>③</sup>村の共同井があつて、そのわきの曲り角に、夜どおし踊りぬいた小判なりの足跡の輪が、はっきり残っていたのもここであつた。来てごらん、あの家がそうだよと言つて、指をさして見せようと思うと、もう清光館はそこにはなかつた。……

盆の十五日で精霊様のござる晩だ。生きたお客はだれだつて泊めたくない。さだめし家の者ばかりで、ごろりとしていたかつたろうのに、それでも黙つて庭へ飛び降りて、まず亭主がぞうきんがけを始めてくれた。三十少し余りの小づくりな男だつたように思う。門口で足を洗つて中へはいると、二階へ上がれと言う。豆ランプはあれどもなきがごとく、冬のままいろりの縁に置いてあつた。<sup>④</sup>それへ十能に山盛りの火を持って来てついで。きょうは汗まみれなのにとましいとは思つたが、ほかには明るい場所もないので、三人ながらその周囲に集まり、何だかもう忘れた食物で夕飯を済ませた。そのうちに月が往来から橋の付近に照り、そろそろ踊りを催す人声・足音が聞こえて来るので、自分たちも外に出て、ちょうどこの辺に立つて見物をしたのであつた。

その家がもう影も形もなく、石がきばかりになつているのである。石がきの陰には若

干の立材木がごちゃごちゃと寄せかけてある。まっ黒にすすけているのを見ると、たぶ  
んわれわれ三人の遺跡の破片であろう。いくらあればかりの小家でも、よくまあ建って  
いたなと思うほどの小さな地面で、片すみには二、三本のとうもろこしが秋風にそよ  
ぎ、残りも畑となって一面のかぼちやの花盛りである。

何をしているのか不審して、村の人がそちこちからなにげない様子をして吟味にやっ  
て来る。浦島の子の昔の心持の、いたって小さいようなものが、腹の底からこみ上げて  
来て、ひとりならば泣きたいようであった。

何を聞いてみてもただでいいいなばかりで、少しも問うことの答えのようでなかつ  
た。しかし大ぜいの言うことを総合してみると、つまり清光館は没落したのである。<sup>⑤</sup>  
月日不詳の大暴風雨の日に村から沖に出ていて還らなかつた船がある。それに、この宿  
の小づくりな亭主も乗っていたのである。女房は今久慈の町に行つて、何とかいう家に  
奉公をしている。ふたりとかある子どもをそばに置いて育てることもできないのは、か  
わいそうなものだと言う。……

この晩わたしは八木の宿に帰つて来て、バリに居る松本君へはがきを書いた。この小

さな漁村の六年間の変化を、なにかわれわれの伝記の一部分のようにも感じたからである。仮にわれわれが引き続いてこの近くにいたところで、やはり卒然として同様の事件は発生したであろう。また、まるまる縁が切れて遠くに離れていても、どんな出来事でも現れうるのである。が、こうして二度やって来てみると、あんまり長い忘却あるいは天涯万里の漂遊が、なにか一つの原因であったような感じもする。それはそれでぜひがないとしても、また運命の神様もご多忙であろうのに、かくのごとき徴々たる片すみの生存まで一々点検して、与うべきものを与え、もしくはあればかりのねこの額から、もとあったものごとごとく取り除いて、かぼちゃの花などを咲かせようとなされる。だから誤解の癖ある人々がこれを評して、不当に、運命のいたずらなど言うのである。

(柳田国男の文による。)

左の各問は本文傍線部にそれぞれ対応しているものである。

問(一) 筆者がはじめて小子内をたずねたのは新暦にしていつごろのことか。

問(二) こんな「寂しい村」に、どうして宿屋があるのか、めったに泊り客はないにして

も。(本文に出ていることだけをもとにして考えること)

問(三) 踊りの場所としてなぜこのようなところがえらばれているのか。(小学校の校庭などがあつたとしてもそこは使わないかと思われる。)

問(四) なぜ暑い時分に火を持ってきたのか。

問(五) これと同じ気持を言いあらわしている部分を取り出してかけ。

問(六) 清光館の没落した事情はこれでだいたいわかるが、それに関連して、もう一つたしかめてみたいことはないか。

問(七) 「運命のいたずら」などと言うのは、ものごとの一面だけを見て他の面を見ないからである。それならば、他の面とは何か、本文のある部分を取り出して示せ。

問(八) 盆踊りをよんだ蕪村の句をかけ。「人に落ちかかるかな」を使って。

二 次の文についてあとの問いに応じなさい。

世の中にむつかしきことをする、人を貴き人といひ、やすきことをする、人を賤しき人といふなり。本を読み、物事を考へて、世間のために役に立つことをするはむつかしきことなり。されば人の貴きと賤しきの区別は、ただその人のする、仕事のむつかしきとや

すきによるものゆゑいま、大名・公卿・侍などとて、馬に乗りたり、大小を差したり、形はりっぱに見えても、その腹の中はあきだるのやうにがらあきにて……ほかりほかりと日を送るものはたいそう世間に多し。なんとこんな人を見て貴き人だの身分の重き人だのいふはずはあるまじ。ただこの人たちは先祖代々から持ち伝へたお金やお米があるゆゑ、あのやうにりっぱにしてゐるばかりにて、その正味は賤しき人なり。

これは、福沢諭吉が維新のころ、幼児のために書き与えた「日々のをしへ」の一節であります。ここには、家柄や資<sup>ア</sup>などの「である」価値から「する」価値へという、価値規準の歴史的な変革の意味が、このようなそぼくな表現の端にも、あざやかに浮き彫りにされております。近代日本のダイナミックな「躍進」の背景には、たしかにこうした「する」価値への転<sup>イ</sup>が作用していたことは疑いないことです。けれども同時に、日本の近代の「宿命的」な混乱は、一方では「する」価値が猛烈な勢いで<sup>ウ</sup>透しながら、他方では、強靱に「である」価値が根を張り、そのうえ、「する」<sup>①</sup>原理をたてまゑとする組織が、しばしば「である」社会のモラルによってセメント化されてきたところ

に発しているわけなのです。伝統的な「身分」が急激に[エ]壊しながら、他方で、自発的な集団形成と自主的なコミュニケーションの発達が妨げられ、会議と討論の社会的基礎が成熟しない時に<sup>③</sup>どうなるか。続々とできる近代的組織や制度は、それぞれ多少とも閉鎖的な「部落」を形成し、ここでは、「うち」のメンバーの意識と、「うちらしく」の道徳が大手を振って通用します。しかも、一步「そと」に出れば、武士とか町人とかの「である」社会の作法はもはや通用しないような、あかの他人との接触が待ち構えている。人々は大小さまざまな「うち」的集団に関係しながら、しかもそれぞれ<sup>④</sup>の集団によって「する」価値の[ウ]潤の程度はさまざまなので、どうしても同じ人間が「場所がら」に依じて、いろいろにふるまい方を使い分けなければならなりません。わたくしたち日本人が、「である」行動様式と「する」行動様式とのごった返しの中で、多少ともノイローゼ[オ]状を呈していることは、すでに明治末年に漱石が鋭く見抜いていたところです。(丸山真男の文による)

問(一) [ア]、[オ] ( [ウ] は二つある。 ) に入れる適当な漢字をかけ。

問(二) 傍線部①と同じことを言いあらわしている部分を書き出せ。

問(三) 傍線部②④の「ながら」は、その上のことと、その下のこととが同時的現象（存在）であることを示すものである。それでは②④において、その下の部分はどうか、それぞれ、はじめとおわりの五文字ずつを書き出して示せ。

問(四) 傍線部③で「どういふことになるか。」とあるが、どういふことになるのか、はじめとおわりの五文字を書き出して示せ。

問(五) 筆者のいわゆる「である」価値というのは、「である」がある固定的価値観念をあらわしている場合であって、本来は、「である」と「する」とは相反関係のものではなくて相関関係にある。そのことを最もよく示している部分（一文）を本文に引用されている福沢諭吉の文章から取り出せ。

五、 「試験問題」の解答

## 解答作成者からのひと言

桑原暁一さんが、その教え子に出しておられた試験問題は、第四章の例示からもおわかりになるように、誰が答えを出しても、同じ答えが出る、というような問題の出し方はしておられない。その問題に対する取り組み方が違うと、答えも自から違って来るのである。

教師である桑原さんとその生徒たちとが、授業時間中に話し合っていたあいだに出て来たテーマについて、お互いに了解した上で、それが出題に到ったようである。従って我々二人の解答者は授業の内容を知らないで、私が出した答えと夜久正雄さんが作られた答えは、必ずしも一致しないものが出てきた。まあそうした経過を経て、大体一致させた答えを次に掲げることにした。従ってここに載せる答えは、読者各位のご参考まで、という意味にとどめて、どうかご自分でそれぞれの答えをお出しいただきたいと思う。

なお、桑原さんの出題で気がつくことは、一所懸命に取り組みさえすれば、出題の文章が必ず理解できるように、原文の重要な箇所が見事に選び出されていることである。出題を作られるのに二三日はかけた、とどこかで書いておられたことを、思い出す。出題に取り組み生徒たちに、国語の実力がついていったこと、間違いなし、と思う次第である。

(葛西順夫、記)

高校一年現代国語試験問題解答

一 問① ①共なるもの ②companion ③兄弟に ④個人 ⑤家族

二 問(一) ①頭 ②締 ③勤 ④注 ⑤納 ⑥表 問(二) 醸金したことが信じられんという

こと 問(三) ア→b イ→a ウ→b エ→c オ→a カ→b キ→c

三 問(一) ア程(限) イ大 ウ態 エ機 オ醸 カ能 問(二) 「市場に豊かなストックがある」から

問(三) わたくしたちは概して大きな構えの家に住んではいけないのだから

問(四) この文章は個人の生活様式におけるストックを主題としていて、市場の問題は

説明ないし傍証として言い添えただけであるから。

高校二年現代国語試験問題解答

一 問(一) また用いるにしてもその**武器**ほどふさわしい**もの**は 問(二) シーザーのそばに

問(三) 殺されるのだ 問(四) その心は(非道に苦しむローマに対する)思いやりでい

っぱいなのに 問(五) よう ⑧ 問(六) ⑥きみの要求は ⑦だれのよりも尊重するつも

りだ 問(七) キャスカが、一番さきにシーザーを背後から刺したから(?) 問(八) 「君

らのおれを見る目が」と対応させるには、「悪意」の方がよい。「悪名」だと第三者の評価になるから。問(九)剣を握った手を生々しく表現するため指を示したのである。問(十) ⑪口 ⑫目 ⑬血 ⑭涙 問(十一) ①↓(b) ②↓(c) ③↓(d) ④↓(a)

問(十二) ハムレット リア王 マクベス オセロ 問(十三) オセロ 第五幕第二場

## 二

問(一) 方法叙説 問(二) そのころのすぐれたある学校でいろいろな書物による知識を学んだ 問(三) ……旅行や従軍をしたということ 問(四) (実人世の体験を通して「良識」

をはたらかせて) 見る 問(五) 真と偽を識別する力 問(六) そういうことを知らなくても別に恥ではないような畑、ちがいのことをたまたま (知った知識がそのうちに常識となるとあって、判断力になるように用いる) から 問(七) ⑦常 ⑧良 問(八) 三十年戦争 問(九)

Cogito ergo sum 問(十) バスカル

## 高校三年現代国語試験問題解答

## 一

問(一) 八月下旬の十五夜 問(二) 八木の終点駅があるから 問(三) 共同井があるところだから 問(四) 明かりの火を焚くための火種として (夏でも夜は冷えるから)

問(五) あんまり長い忘却…… (ひとりならば泣きたいようであった) 問(六) 盆踊りの

二

事について 問(七)小さな漁村の六年間の変化が何か自分の伝記の一部のように感じ  
たから 問(八)四五人に月落ちかかる隔りかな

問(一)ア↓産 イ↓換 ウ↓滲 エ↓崩 オ↓症 問(二)続々とできる近代的組織や制  
度は、それぞれ多少とも閉鎖的な「部落」を形成し、そこでは、「うち」のメンバ  
ーの意識と、「うちらしく」の道徳が大手を振って通用します。 問(三)②自発的な集

…が妨げられ ④同じ人間が…:くくなります 問(四)続々とでき…:通用します 問  
(五)世の中にむつかしきことをする人を貴き人といひ、やすきことをする人を賤しき  
人とはいふなり。

## あとがき

(株)講談社・勤務 磯貝保博

私が千歳高校を卒業したのは、昭和三十七年三月（第十八期生）でしたから、今から十八年も前のことになります。

高校で桑原先生とお話しし合うようになったのは、授業を受けた生徒としてではなく、実は三年生になってからのことで、友人二人と共に先生を囲んで、二十世紀初頭のイギリス人ジョージ・オーウェルの寓話『動物農園―アニマルズ・ファーム』を勉強する英語の小サークルに誘われてからのことでした。

この勉強会に出てみますと、桑原先生は国語の先生でありながら英語の勉強を、それも、生徒に教えるなんて、およそ度はずれた企画のようでしたが、その勉強会を重ねるにつれて、私の心に強烈な印象が次々に生まれてくるのでした。

ある時のことですが、「訳」を指名され、私は自信をもって答えたつもりなのに、先生はきびしい指摘をされるのです。そうした時の先生の指摘は、私にはごくあたりまえのことと思われていたことについて、それを私がつい軽率に扱ってしまうことに対してもう一度改めて考え直してみよ、というところからのものでした。こちらは、ハッとさせられたり、時には赤面さえしてしまうとい

う次第でした。

こうした教え方をうけるうちに、いつしか先生が持っておられる物の考え方に大変奥深さがあり、また幅の広さがあることに気づかされてきて、先生のような教えの中に融け込んでいく自分に気づくこともありました。

桑原先生は、いつも人間という生きた対象——生徒達も含めて——に素直に近づこうとされるようでした。そうした生き方を教えていただけ、それが今日の私にとってのありがたい土台となっているように思われるのです。

さて、この意義深いご本が先輩がたによって出されるに当たりまして、私ごとき者が教え子の一人だから、との理由で「あとがき」の書き手に選ばれたことは、無上の光栄であります。高校三年間に桑原先生から直接に国語の授業を受けた仲間達の桑原先生に対する感想・思い出こそ、本書の末尾を飾るにふさわしいと思いますので、以下三人の仲間が先生の一周忌（昭和四十九年）に書いてくださった短文を拾って、ご紹介申し上げ、以て私の「あとがき」の責を補っていただきたいと思えます。

(一) 桑原先生の思い出 昭和四十五年卒(第二十六期) 長田三枝子(旧姓・生形)

私は、先生に一年間古典をお習いした。たった一年間であったが、今になってもその授業がいちばん印象に残っている。それはなぜだろう。それは先生の人的魅力と非凡な頭のひらめきにひかれていたからであろうか。

先生との出会いは千岳荘、夏の移動教室である。地下足袋をはいて、さっそうと安達太良山を登る先生を、私達は山のおじさんかと思っていた。そのおじさんが、二年になって教室に現れたのに困惑してしまった。初めは風変わりな先生だなあと思っていた。先生も初めは実際そうしていたように思われる。教科書を小わきにかかえ、おもむろに教室に入ってくる。教壇に着くか着かぬ間に、ひとりで御辞儀をすませてしまう。立ちあがった私達は機を失っておどおどしてしまおうといった調子だ。だんだんと、先生は、本来のペースにはいり、持ち前のさえを発揮され、私達は知らず知らずのうちに、古典文学の世界にひきずりこまれてしまう。先生の授業は、解釈だけにとどまらない。いわゆる生きた古典学習といえよう。先生の頭の中は、鋭敏で、研ぎすまされた刃物のよう、すべてそれでさばいてしまう。奥深くに刺しこまれたものをみて、はっとする思いであった。あるいは、それに気がつかないことも多かったかもしれない。しかし、先生の講義を聴い

て、少しながら古人の心情にふれることができたように思う。先生は、貴重なことばをさらりと言  
いすぎる。泉のように流れる深い知識を、うかうか聴いていると聴きもらしてしまふ。その反面、  
その知識、考え方をいつも、何か黒いヴェールのようなもので、おおい包んでいるようにも思え  
る。

先生は、時々冗談を言われ、妙に高い声で笑われる。それをきいてまたみんなも笑い出す。ま  
た、めったには叱らないが、先生の叱り方は男性的だ。「うるさい！ 静かにしてちょうだいよ」  
と大きな声でどなって、すぐまたもとの話に戻る。頭の転換も速い。

ある日授業で、みんなで連句を作った。その中に

桑の木の育てし蚕幾千万

という句が、男子生徒から出されたのが忘れられない。

先生の思い出はまだまだたくさんある。しかし、文にならないのだ。私の表現力の乏しさはある  
う。しかし、先生自身、ことばでは言い表わせない何かを持っているのだと思う。

先生の人生、十分に發揮できたのでしょうか。千歳をやめ、これから研究室に入られるというこ  
とを聞いていた。これから、もっともっと活躍してくださいださると思っていたのに残念でならない。で  
きるならもう一度、先生の講義を聴きたい。先生の亡くなられたのが信じられない気持だ。私の脳  
裏に先生の元気な姿が、あの安達太良を歩く姿がちらつく。先生、亡くなられてしまったんです

ね。でも、先生はいつも私達の心に、書物に生き続けるでしょう、と信じます。

(二) 思い出

昭和三十四年卒（第十五期） 榎富士通 吉本幸一

生前のご無礼をせめて追悼文集に寄せていただくことで、ご供養させていただこうと存じます。私どもは昭和三十一年（第十五期）に千歳に入学し、桑原先生の担任される一年三組に編入されました。入学して早々ですから、全ての事が目新しく感じられました。桑原先生は背丈は小柄な方でしたが、額のやたらと広い面白そうな先生とお見受けしました。

先生は国語乙（古文に該当）を担当されましたが、そのバラエティーに富んだ講義と挿話はまことに妙を得て、生徒の心に響き、それらの印象は十七年たった今でも私の心に残っております。

ある講義時間には謡の師匠よろしく、教科書そっちのけで、うなり方のお手本を示してくれました。あらかじめ一部の生徒に用意させて刷り上げた元雅作の「隅田川」の中にある都鳥の地謡の部分をあの特有なイントネーションをつけて教え込むわけです。その時の全員のうなり声たるや、おそらく知らぬ人が聴いたら高等学校の授業だとは信じられなかった事でしょう。まして最後には暗誦で唱わせるまで教え込んでしまうのですから大した先生、いや師匠でありました。そのとき覚えただけで今でも、うなれるのですから不思議です。会社の宴会などでその時の記憶をうならせてそ

の場を怪しく、しかし難なく切抜け得たことも一度ならずで、先生のお蔭や大であります。

またある時は袴姿で教室に入ってくるなり、「今日はこの教壇はいらないから」といって教室の端にずらして、広いスペースを作ったかと思うと黒田節の舞を神妙に披露してくれます。この舞の仕草の意味も解説して下さりましたが、この舞は生徒にはやらせませんでした。しかし先生の弁ずる事、振舞うことのレパトリの広さにはただ驚かされるばかりで私どもは畏敬の念を禁じ得ませんでした。

しかし一方心の底では、クラス全員の実力向上を願っておられた様子で、実力考査の結果我々のクラスがあまり上位を占めなかったときは半分冗談風に「ばかやろ」などと鼓舞され、教育者としての情熱を傾けられておられた事も事実です。

私は通学は京王線代田橋駅からでしたが、たまたま桑原先生と同方向であったため登校の電車の中でお会いした事も二、三度あります。丁度先生の隣の席が空いて、おそれながら横にすわりました。たまたま私が単語カードをめくっていたのを見て、「どれ見せてごらん」と言われ、お見せするとパラパラとめくって「わりとやさしい単語を覚えているんだネ」と一言で言われ赤面の至りであった事を覚えています。国語の先生なのに英語も相当強いんだと先生の実力の程が伺えて、恐れ多く感じた事でした。

さて、思い出はつきませんが、このような先生の人情味とご博識を思いおこすとき、我々は心新

たに先生に学ぶべき点の多いことを今更に知ることができるとのことです。

### (三) 桑原先生の印象

昭和四十四年卒(第二十五期)

著述業 庄司歩

僕が高校一年の時の文化祭で、あるクラスが劇で漱石の「ぼっちゃん」をやりました。その会場で、一人の先生が、もう一人の先生へ話をしていました。それは、「ぼっちゃんは、教頭達をなくったりはするけれど、結局、自分の方がその場から退散する訳ですよ……」。問題は一つ解決してないんですよ……。漱石自身も云々」といった内容の漱石論でした。当時、僕はその先生の名前は知らなかったのですが、どういう訳か、その時の先生の口調や、表情、話の内容は今でもよく覚えていられるのです。これが、僕にとって一番古い、桑原先生の思い出です。ついでですが、その後、先生の漱石論は、三年の現国の時間に一回、玉造温泉の青砥さんの所で一回聞くことになりました。三年の現国の時には、「漱石の小説は、人生の断面ではなくて、人生の実験室ですね。けれど、最近思うんですが、やはり、そこから精神の血はしたり落ちていくんですね」と、最近、そう思うようになったという「精神の血はしたり落ちていく」という所を強調していました。

二年の古文と漢文の授業が桑原先生でした。最初の授業で先生は、「予習をしてきた者は手をあげてちょうだい」(幸い、手をあげた者は一人もいなかった)そして、「もし予習をしてきた者がい

たら、廊下に出てちょうだい。予習なんかしてくる者は、僕の授業をうける必要はありません」こんな内容のことを真面目な顔をして言いました。勿論、僕はシーンとして聞いていましたし、多くの者は先生の言ったことを逆の意味に解釈したのです。けれども、日が経つにつれて、それをどう解釈したらよいのか判らなくなりました。というのは、桑原先生の授業では、僕達が予習をしてきても、それが役に立つようなことは一切なかったからです。

先生はよく、古文の教科書の本文の下に付いている註釈のまちがいを指摘して、その理由を僕達に強引に納得させるのでした。そして時には「出版社に電話をしておいたから、来年の教科書からは直ります」という文句を続けるのでした。そんな時、生徒はただ呆気に取られているばかりだったのです。古典の授業は、たいてい、こんな調子で、だいたいにして一方的な授業でした。それに、先生は授業中、生徒の勉強ぶりや、理解ぶりをためすようなことは決してしませんでした。生徒に何かをやらせたい時には、必ず機の順にあてました。あてられた生徒が失敗をしでかしても、そういう時には怒りませんでした。また、デキの悪い生徒をバカにするようなことも、決してありませんでした。自慢ではありませんが、これらのことは、この僕が一番よく知っているのです。テストの度に最低点をとるのは、たいてい僕だったからです。

こんな訳で、桑原先生の授業の予習をしてくる者はいなくなつたようです。

三年になると、今度は現代国語の授業が桑原先生でした。現国の桑原先生は、古典の桑原先生よ

りも生々としていました。卒業後ですが、そのことについて先生自身が、こんなことをいっていました。「どうせ僕の授業をうけるんだったら、現国じゃなくっちゃね。そうだから庄司」

何故、先生が現国の授業の方が好きだったかを説明するのは簡単です。現国の方が、教科書を離れて、勝手気ままなことを、しやすかったからです。先生は、そうすることで持ち味を十分に発揮したのです。勿論、生徒もそれを期待していましたし。

在学中にも、先生にとって現代国語の授業がどんなものであったかを、先生の口から聞く機会がありました。卒業が二カ月ぐらいに迫った時でした。僕達のクラスでは、週一回五十分のホームルームの時間に、毎週一回ちがった先生に、卒業を間近にした僕達に「いっておきたいこと、覚えておいて欲しいこと」といったテーマで話をしてもらうことになりました。先生を何人か選ぶに当たっては、クラス全員が投票をし、そして、票の多い先生から交渉を決めていくことになりました。投票の結果、最も票の多かった先生は、やはり桑原先生でした。そして、当時クラス委員をやらされていた僕が、先生の所へ交渉に行くことになってしまったのです。もう既にその時は、先生とも学校の外でちょくちょく会っていたので、かえっていやだったのですが。先生の方も、僕がいくと、私用かと思っただらしくて、「おお、庄司、どうしたんだ」といいながら、国語科の部屋から、廊下に出ました。先生の返事はこうでした。「あらたまって、そんな話をみんなの前でするなんてことは、僕にはできません。だいたい、僕の現国の授業がそういったものなんだから……。そ

こん所をお前からみんなによく話しておいてちょうだい」

桑原先生の現国も古典と同じく一方的な授業でした。つまり、生徒に何かをやらせるなどということとはめったになくて、たいてい先生が一人でしゃべっているのです。といっても、生徒から分離して勝手にやっている、といったことではないのです。先生は生徒との一体感をとても大切にしていました。またそれを生徒の方にも要求していました。そういったことから、先生には好きなクラスと嫌いなクラスがあったようです。僕のいたクラスは、幸い先生も気に入っていたようで、よく脱線しました。ある時には、きのう作った句だといって、

老残の書齋明るむバラ五輪

と黒板に書きました。たいていそんなことをしながら生徒と一体になっていくのでした。そして本当に一体になった時には、目を細めて、つぶやくような話し方で、しみじみとした話をしてくれました。僕はこういった時の先生が一番好きでした。昔、小さかった二人の息子さんを、おんぶした時に、背中に伝わってくる子どもの感触のよかったこと。留置場に入れられた時、(編者注、戦時下の昭和十八年、同志と共に東条内閣に生まれて百余日留置場に入れられたことがある) たまに吸うタバコのおいしかったこと。靴みがきをしていた朝鮮の青年のこと。その青年が書いては持ってくる小説のこと。酔っ払っては外にねて、たまにはドロッコの中でねていたという話。山谷のこと。親鸞のこととか、こういった時にする話の題材そのものは、さびしいもの、かなしいもの、う

れしいものと、色々でした。けれども先生の口や表情から表現されてくると、そういった感情からは離れた一つのものになって、不思議ななつかしさやはるかさを僕達に感じさせるのでした。そして、僕の内にはそれが、数多くの苦しみや絶望を味わってきた人が、「それでも、やっぱり、生きる」ということは尊いのだよ」と、つぶやいているかの様に映っていたのです。

昭和五十六年一月二十日発行

頒価 四八〇円

“とっちゃん”先生の国語教室

—— 桑原暁一・遺稿から ——

国文研叢書 No. 22

編者

社団法人

国民文化研究会

理事長

小田村寅二郎

発行所

社団法人

国民文化研究会

104 東京都中央区銀座七―〇―一八

(柳瀬ビル)

電話〇三(五七二)一五二六―七

振替東京 七―六〇五〇七番

印刷所

慶昌堂印刷株式会社

東京都文京区水道二―四―二六

国文研叢書 (新書判)

No 1	夜久正雄著	古事記のいのち (改訂版)	原41年・改48年	316頁
No 2	桑原晩一著	日本精神史鈔 親鸞と実朝の系譜	41年	279頁
No 3	高木高一著	弁証法批判の歴史	42年	241頁
No 4	小田村寅二郎編	日本思想の系譜 文献資料集・上巻(古代・中世)	42年	309頁
No 5	小田村寅二郎編	日本思想の系譜 文献資料集・中巻その1(近世I)	43年	317頁
No 6	小田村寅二郎編	日本思想の系譜 文献資料集・中巻その2(近世II)	43年	409頁
No 7	小田村寅二郎編	日本思想の系譜 文献資料集・下巻その1(近代I)	44年	403頁
No 8	小田村寅二郎編	日本思想の系譜 文献資料集・下巻その2(近代II)	44年	381頁
No 9	川非修治著	歴史と人生観 ヌルクス主義の超克	43年	283頁
No 10	小田村寅二郎編	欧米名著邦訳(明治)集 文献資料集	45年	483頁
No 11	桑原晩一著	続 日本精神史鈔 花山院とその系譜	45年	310頁
No 12	夜久正雄・山田輝彦共著	短歌のすずめ 創作と鑑賞	46年	309頁
No 13	夜久正雄・山田輝彦共著	短歌のあゆみ (続 短歌のすずめ)	46年	316頁
No 14	桑原晩一編	ヨーロッパにおける ヌルクス主義批判論集	48年	338頁
No 15	夜久正雄著	白村江の戦-7世紀・東アジアの動乱	49年	324頁
No 16	桑原晩一遺著	国史の地熱 聖徳太子と楠氏の精神	49年	293頁
No 17	戸田義雄編	日本における ヌルクス主義批判論集	51年	320頁
No 18	三井甲之著	明治天皇御集研究(復刊) 52年		354頁
No 19	本会編	いのち ささげて 戦中学徒・遺詠遺文抄	53年	450頁
No 20	本会編	続 いのち ささげて - 戦中学徒・遺詠遺文抄	54年	421頁
No 21	加納祐五・三浦貞藏共編	社会主義理論との戦い(山本勝市博士論文選集)	55年	420頁







